美少女戦士セーラームーン　ミニドラアドベンチャー

村上　妙夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美少女戦士セーラームーン　ミニドラアドベンチャー

【Ｎコード】
Ｎ２２５０Ｑ

【作者名】
村上　妙夏

【あらすじ】
ヘル・ディスティーの戦いから４ヵ月後、うさぎ達は夏休み初日にほたるの父土萌教授の家に遊びに行ったが、教授は突然隣町に引っ越すことになってしまった。うさぎ達は、最後の思い出として、土萌親子とタイムトラベルをすることになった。
ちびうさの時空の鍵で２１世紀初期ののび太達のところに行くこととなったが、些細な手違いで２１世紀後期の時代にきてしまった。
その町で友人のドラえもんに良く似た小さなネコ型ロボットミニドラと仲良しなった少年・のび労と出会う。

実は、ミニドラは22世紀のネオ・クイーン・セレニティがのび太と間違えて贈ったものだった。
途中で合流したドラえもんズ及びドラミと協力してミニドラの捜索をすることになった。
セーラー戦士のドタバタアドベンチャーが今、始まろうとしている。
『ドラえもんとセーラームーン』の続編が遂に登場。

ゲストキャラクター・オリジナルアイテム・オリジナル技（前書き）

ちょっと、抜けているところがありましたから解説しておきます。

ゲストキャラクター・オリジナルアイテム・オリジナル技

ゲストキャラクター

ヒーロー

ミニドラ・・・22世紀のネオ・クイーン・セレニティが勝手に小学生時代ののび太に贈ろうとしたロボット。サイズは『ミニドラSOS』の同じ大きさ。ゼノタイムとゼオライトを慕っている。

野比のび労・・・のび太と静の孫。祖父譲りと容姿と祖母譲りの知能を持つ10歳の少年。

いつもスネタやジャイ吉をいじめては祖母に叱られる。幼少時のスネ夫並(お)みの悪知恵を働く。ミニドラとは大の仲良し。

剛田マサシ・・・通称ジャイ吉。ジャイアンの孫。父譲りの両親を持つ。のび労の幼馴染。

いつものび労に苛められている。店からありったけのどら焼きを持ってミニドラの冒険に使った。

骨川スネタ・・・スネ夫(お)の孫でのび労の幼馴染。祖父とは対象に幼少時ののび太の数倍泣き虫。よくのび労に泣かされる。最初にミニドラに遭遇した。

ヒーローの家族

野比家

野比ノビスケ・・・のび太としずかの息子でのび労の父。『ミニドラSOS』の主人公の1人。

野比ユカリ・・・のび労の母でノビスケの幼馴染。

野比のび太・・・のび労の父方の祖父。嘗てうさぎ達と共に戦った仲間。

野比しずか・・・のび労の父方の祖母。嫁のユカリと仲良しの老婆。いつも悪知恵やいじめを行うのび労を叱っている。

剛田家

剛田武・・・通称ジャイアン。ジャイ吉の祖父。孫にドラえもんとセレニティの話をする。

剛田ヤサシ・・・通称ジャイチビ。ジャイアンの息子。『ミニドラＳＯＳ』の主人公の１人。

骨川家

骨川スネ夫・・・スネタの祖父。いつものび労を可愛がっている。会社の社長。よくセレニティと会議で会う。

骨川スネ樹・・・スネタの父。『ミニドＳＯＳ』の主人公の１人。

脇役

菜秋・・・のび労達の同級生の少女。将来はのび労の妻になるかもしれない。

館長・・・水族館の館長。またまた来てしまったのび労やゼノン（ゼノタイム）、そしてミニドラに芸を疲労してくれと依頼した男性。のんびりやでゼノンのことを善人と思っている。

２１世紀末期のネオ・クイーン・セレニティ・・・未来のうさぎでちびうさの母。アチモフに捕えられるがセーラー戦士とドラえもん達によって救われる。

２１世紀末期のキング・エンディミオン・・・未来の衛でちびうさの父。妻同様、アチモフに捕まるがセーラームーン達に救われる。

アマゾンツイン
原作オリジナルキャラクター。今作の小説で登場した双子の青年。アマゾン・トリオの１人・フィッシュ・アイの部下。特技はナイフ投げ。召喚する女性レムレスは全て普通。最初はペガサスを追いかけていたが、のび労達やほたるの良心に触れて改心してペガサスに人間にしてもらい２１世紀末期で暮らしている。
ゼオライト・・・兄。ほたると心を通わせた青年。彼女の夢を探ろうとしたが外れだった。ナイフを振り上げることしかできないフィッシュ・アイと違いナイフ投げが得意。ほたるたちを助けようとして弟とミニドラと行動を共にして、クリスタル・パレスに侵入。改心後に、ペガサスに人間にしてもらい２１世紀末期で生活する。

ゼノタイム・・・弟。のび労がペガサスの宿り主と思い彼等の冒険に参加してのび労を襲ったが彼も外れだった。兄同様、ナイフ投げが得意。アチモフに捕まったのび労達を助けようとしてありったけのどら焼きを所持してミニドラと兄と行動を共にした。兄同様。改心後、ペガサスの力で人間になった。

オリジナルレムレス
ツキコ・・・アラビアの踊り子の少女のような姿をしたレムレス。半月刀を振り回したり、ゼオライト達同様にナイフを投げたりする。セーラーちびムーンに敗れた。

マーメイコ・・・人魚の少女の姿をしたレムレス。水中だけじゃなく地中にも潜れる。水を使って攻撃する。セーラームーンに倒さ

れた。

アカリコ・ヒカリコ・・・猫の姿をした妹と狐の姿をした姉の双子のレムレスの少女。鋭い身のこなしでドラミとキッドと苦戦させた。

後にセーラームーンとセーラーちびムーンに浄化させる。

アイテム

セイント・ムーン・アロー・・・セーラーちびムーンのオリジナルアイテム。ムーン・スティックとクリスタル・ムーン・カリヨンをペガサスの角の光で融合した弓矢。必殺技・ムーン・プリンセス・ドリームライトをはなつ。

必殺技

サイレント・ボール・・・セーラーサターンのオリジナル技。サイレンス・グレイブから紫の球体を相手にぶつけて爆発させる技。攻撃系。

ムーン・プリンセス・ドリームライト・・・セーラーちびムーンのオリジナル技。セイント・ムーン・アローをから光の矢を放ち敵を浄化する技。

Wムーン・ゴージャス・ドリーム・シュート・・・セーラームーンとセーラーちびムーンのオリジナル合体技。この技を使うにはドラえもんズの友情パワーが必要になる。巨大な光の矢を発射して敵をじょうかする。

ゲストキャラクター・オリジナルアイテム・オリジナル技（後書き）

ちょっと、おっちょこちょいの私ですが、次回作は今月末に開催されます。

戦士達の休日（前書き）

この話は、ＳＳの番外編です。
ちびうさちゃんは子供達の夢の中だけに現れる不思議な幻獣・ペガサスと出会い、デッド・ムーンとの戦いにうさぎちゃん達と共に巻き込まれてしまいスーパー系で戦うことになりました。
今回は外部系戦士の１人セーラーサターンと行動することになりました。
ほたるちゃんの活躍がまた見られます。ダイアナちゃんとドラえもんの感動の再会が果たせます。

戦士達の休日

２０世紀後半　７月２０日　午後　うさぎの家

２０世紀の女子中学生・月野うさぎは、未来の娘のちびうさと友人のほたるの家に遊びに行くことになった。

「うさぎ、ちびうさ、一体何処に行くんだ。」

「土萌教授の家に行くのよ。」

「えー、いいな。僕も行きたい。」

弟の進吾は行く準備を整えようとするが姉に止められた。

「だめよ。これは、アタシたち乙女の問題だから。坊主は決して邪魔はしないの。

キミは家にいなさい。

それじゃ、行ってきまーす。」

「ちょっと待ってよ。うさぎ。」

うさぎは、ちびうさの手を引いて玄関を出た。彼女の制止を振り切って。

取り残された進吾は部屋に帰って御菓子のヤケ食いをしようとするが、

「あれ～、御菓子がな～い！

うさぎの仕業だな～～～～！コン畜生～～～～！」

道路

ちびうさとうさぎは言い合っている。

「ちょっと、うさぎ。進吾くんを連れて行ったっていいじゃない。別に減るものじゃなし。」

「だめよ。進吾がいたら帰ってややこしいことになるじゃない。そんな我侭ばかり言ってるからいつまでたっても素敵なボーイフレンドができないんじゃない。」

「何よ。半分はアンタのせいでしょう。アンタの。この前なんか

アタシがせっかくマサノリくんのために作ったアップルパイ食べた上にちゃかして、お陰で大恥かいたじゃないの。」
いつもならすぐに言い返すうさぎだが、先日のアップルパイの話題になると返す言葉はなかった。
「まだ、根に持ってたんだ・・・・？」
「当たり前でしょうが！」
先日ちびうさが作ったアップルパイを育子ママが作ったと勘違いしたうさぎは自宅に訪問したレイたちと誤(あやま)って食べてしまった。元々はうさぎが勘違いしてもってきたのだが、うさぎと食べてしまったレイたちも悪かった。しかし、最大の責任はうさぎということになってしまいちびうさに代表として怒られてしまった。
〜これは相当怒ってるみたいだ。〜「まあ、その話はおいといて。ほたるちゃんの家に行きましょう。ね。」
うさぎはちびうさを連れてほたるの家に向かう。

ほたるの家の前
うさぎとちびうさが辿り着いたときは引越しのトラックが来ているのだ。
レイたちも来ているのだった。
「みんなどうしたの？」
「あら、うさぎにちびうさちゃん。大変よ。」
「何が？」
「土萌教授が隣町に引っ越しちゃうのよ。」
「えーーーー！？そんなーーー！」
ちびうさはがっかりだ。せっかくできた友達が急に引っ越してしまうのだ。
「なんでも、自分の人生の生きなおすために引越しをするんですって。」
「無理もないな。ほたるちゃんが新しい人生を育むために二人で平常な家に暮らすことになるんだから。」

『うんうん。』
教授の引越しの荷物は次々と詰まれて行く。教授の両腕には日焼け対策をしてもらったほたるが抱えられている。
ほたるはうさぎとちびうさに気付くなりニコニコと手を振っている。
「ほたる。お友達で来てるのか。おや、うさぎちゃん。ちびうさちゃんも、こんな暑い中、見送りでもきたのかい。」
「ええ、まあ・・・。」
ちびうさもうさぎも突然の分かれに多少浮かない顔をしている。

喫茶店・クラウン
リビングもすっかり片付けられていて、うさぎ達と仲良しの宇奈月が働いている喫茶店のクラウンでお茶をすることになったのだ。
「そっか、残念でしたね。せっかくセーラー戦士の友情が深まってきたのに・・・。」
「私も残念だとはつくづく思うんだけど、しょうがないんだ。すまないね。せめていい思い出を作ればよかったのにな。」
教授は深いため息をついた。
教授もほたるも元々はデス・バスターズに利用されていたために酷い目に遭い、セーラー戦士に救い出されて和解したのだった。現在はうさぎ達と大の仲良しだった。
ちなみにヘル・デスティニーの土萌は偽者だったのだ。どういうことかは不明だ。
ほたるは戦いの度に急成長をして、終わったら戻るのがお約束だ。
「ねえ、教授。思い出なら私達みんなで作ってみたらどうですか？」
美奈子は何か提案を出した。
「みんなで？」
「そうです。アタシたちセーラー戦士はこうして絆を深めたみたいですから。なにかいい思い出を作ってみたらどうですか？」

「うーん、思い出か？」
ちびうさは手を上げる。
「じゃあね。タイムトラベルってのはどうかな？」
「タイムトラベル？いいね。」
「じゃあ、決まりね。」
「わーい。」
ちびうさは大喜びだ。ほたるもきゃっきゃっと喜んだ。
ちびうさ達は新たな冒険にでるのだった。

戦士達の休日（後書き）

ちびうさちゃんはほたるちゃんと最後の思い出としてタイムトラベルをすることになりました。
うさぎちゃんもちびうさちゃんもセーラー戦士も新たにパワーアップして新たな困難に立ち向かいます。
今度はのび太くんのお孫さんとハチャメチャな騒ぎを起こすかもしれません。
のび労は私が付けた名前です。彼の活躍も疲労します。

サマーアドベンチャー（前書き）

セーラー戦士たちは土萌教授とほたるちゃんを連れて時間旅行することになりました。
今回はダイアナちゃんも登場します。
ダイアナちゃんは今作で初登場です。

サマーアドベンチャー

衛のマンション

衛は灰色の仔猫のダイアナに目を付けられている。もうすぐ大学の資料ができるのでその作業に入っている。本当は遊びたいところだったが、キングとしての修行のためにダイアナにみっちりと見張られている。

ダイアナというのは、未来のルナとアルテミスの子供。クイーン・セレニティの許しを貰いちびうさのところに遊びにいったが何時の間にかそのまま、うさぎの家に居候するようになってしまった。

「ダイアナ、何もそうじーっと睨まなくても仕事はちゃんとするよ。」

「そうはまいりません。衛様は将来キングとなるのですから見張りの1つや2つしとかなければいけません。」

ダイアナは可愛い姿とは裏腹にしっかりもので、突っ込みは母のを上回るほど上手い。

「さすがルナの娘だ。」

窓際のアルテミスも固まっている。

「何ですって？」

ルナはアルテミスを睨む。

「それにしても、うさこはどうしてるのかな・・・。」

「衛様！」

「はいはい・・・。」

〜ちびうさ、ダイアナを何とかしてくれ〜〜〜〜。〜

時空界

ちびうさの時空の鍵で土萌（ともえ）親子とタイムトラベルをすることになったうさぎたち。

「それにしても残念ね・・・。」

「何がさ、亜美ちゃん？」
「タイムトラベルと言ったら、過去の世界にいくと思ったら21世紀に行くだなんて。これじゃ歴史の勉強ができないわ。」
「あ、亜美ちゃん・・・。」
美奈子は亜美に突っ込みを入れる。
「あたしは、てっきり里帰りかと思ったわ。」
「何、言ってんの？タイムトラベルって言ったらのび太くんやドラちゃんに会いにいくだけなんだから。」
「ドラちゃんか・・・。そういえばあのバカ狸今頃如何してるんだろう？」
「レイちゃん。狸じゃなくて猫よ。もうだから、雄一郎さん以外の男性と恋仲になれないのよ。」
「大きなお世話よ！イ～～～～っだ！」
「べ～～～～っだ！」
うさぎとレイのケンカは時空の扉に着くまで続いた。
「あははは・・・。相変わらず仲良しさんだな。ほたる。」
「よしよし。」
土萌（ともえ）親子も大喜びだ。

時空の扉の前
「スモール・レディ。御無沙汰しています。」
セーラープルートはいつものように時空の扉を守っている。今回は土萌（ともえ）親子も一緒だ。
「久しぶり。せつなくん。」
「お久しぶりです。教授、ほたる。これから、スモール・レディ達とクリスタル・パレスに参られるのですか？」
「ううん。今回はのび太くんやドラちゃん達のいる21世紀初期に行くの。のび太くんやみんなに早く逢いたいんだ。」
「なるほど、あの人たちともうすっかり仲良しなのですね。いろんな時代でまたいいお友達ができるといいですね。」

プルートはガーネット・ロッドを翳すと時空の扉を開いた。
「のび太さんやドラえもんさんによろしくお願いします。」
「は～い。行ってまいりま～す。」
「行ってらっしゃいませ。」
プルートは笑顔で見送る。

7月中旬　昼ごろ　空き地
うさぎたちは空き地に着いた。
「おう、ここが21世紀か。なんか機械が所々あるような街ね。」
確かに所々機械がある。
「この時代にのび太くんたちがいるのかな？」
「判らないわ。とにかく、のび太くんを探しましょう。」

小学校の前
うさぎ達はとりあえず、この町の小学校を尋ねることにした。
「ここが、のび太くんたちの通っている学校か。アタシたちの学校とは比べ物にならないほど、アップルね。」
「ちょっと、美奈子ちゃん。それをいうならシンプルだよ。」
「何にせよ。のび太くんの知り合いということで尋ねてみましょう。」
その時、校庭から男の子の鳴き声がした。
「誰だろう、今時いじめなんてあまりにも酷いじゃない。」
「おし、ちょっと行ってみますか。」
「がってんでえ！オヤビン！」
ちびうさ、うさぎ、美奈子は学校に乗り込んだ。
「おいおい、3人とも不法侵入だぞ。」
「この学校の先生に叱られるよ。」
まことと教授が止める間もなく3人は行ってしまった。
「まったく、何やってんだか。」
レイは多少呆れ顔だ。

校庭

狐のような顔をした男の子は頭にバケツを被ってずぶ濡れになって泣いている。小太りの男の子の方は吃驚箱のスプリング付きの蛇の人形をみて気絶している。恐らく茶髪の少年の罠にはまったらしい。少年はケラケラ笑っている。

「酷いよ。のび労。僕達、何も悪いことをしていないのに・・・横から水をかけるなんて～～。」

「騙されたスネタの方が悪いんだよ～ん。べ～～～～～！」

そこへうさぎが襟首をつかんで肩に担ぎ尻を苛められた子供達に見せた。

「ちょっと、何するんだよ！？」

「それは、こっちの台詞よ！いたいけな子供を苛めるようなオイタは許しません！」

うさぎは、のび労とか云う少年のお尻を数回たたき捲った。

「イテ！イテテ！普通人のお尻を叩くか家のおばあちゃんみたいに！」

「だまらっしゃい！悪戯にもほどがあるでしょうが！」

うさぎはのび労のお尻を叩き続ける！

その間ちびうさはずぶ濡れのスネタの水分をハンカチで拭取り美奈子は小太りの男の子を保健室に連れて行く。

うさぎのおしおきはまだ続く。

「イテ！もう悪戯しませんからやめてください！お姉さま！」

「ホントに！」

「はい！」

うさぎは尻たたきを中断するとのび労の襟首を再び掴んで向かい合わせて睨みつけた。

「今度、いじめなんかしたら承知しないわよ！いいわね！」

「はい・・・。」

うさぎはのび労を下ろした。途端に笑顔になった。

「ねえ、ぼく。この町に野比のび太っていう人物知らない。」
「のび太おじいちゃんのこと？」
「そうそう・・・っておじいちゃん？」
「うん、僕、野比のび労。」
「アタシ、月野うさぎ。おじいちゃんのお友達なんだ。あたしとあの子達は。」
「へー、おじいちゃんの友達か。」

校門の前
「お待たせ。」
「『お待たせ。』じゃないよ。だめじゃないか無断で学校に入っちゃ。」
「ごめんごめん。」
「あれ、その子達は？」
うさぎたちの横にのび労たちがいた。
「のび太くんたちのお孫さんなんだ。」
『のび太くんたちの？』
「はい。剛太マサシです。ジャイ吉って呼んでください。」
「骨川スネタです。この人たちに助けてもらいました。」
「僕は野比のび労。よろしくね。」
「ええ、よろしく。」
〜どうなっているんだ？のび太くんたちの時代じゃないのか。〜
「亜美ちゃん、亜美ちゃん。アンタのコンピューターで調べられないの？」
「ちょっと、待ってね。」
亜美はコンピューターで調べてみる。コンピューターにはこうかかれていた。
「２０６１年７月２０日！？」
「お姉ちゃん、どうしたの。そんなに騒いで。」
彼女達は間違って２１世紀後期の世界に来てしまったらしいのだ。

サマーアドベンチャー（後書き）

うさぎちゃんたちはどうやら間違って２１世紀の後期に来てしまいました。
のび太くんは次回で登場します。
どうやったらプルートは間違えるのでしょうか？

のび労（前書き）

のび労くんは１０歳の男の子。野比のび太くんと源しずかちゃんの孫息子。
頭脳とお茶目な性格はしずかちゃん譲りですが、体力と容姿はのび太くん譲りです。
いつもはジャイアンの孫のジャイ吉とスネ夫くんの孫のスネタくんを苛めています。その度に祖母に叱られます。
まるでお父さんのノビスケくんみたいです。彼に続く苛めキャラです。
そんなのび労くんはセーラー戦士及びミニドラと面白い騒ぎを起こします。

のび労

２０６１年　７月２０日　放課後　小学校の図書室

野比のび労は小学４年生の少年。成績はいいが運動はややからっきし。そんなのび労は２人の少年と図書室で勉強会をしている。

のび労は苛立ちつつ小声で説教した。なにしろここは図書室だからだ。寝てしまう子もいるのは当然で図書委員に起こされるのはしばしばだ。

「違うの。ここはコウやるの。」

「だってさ・・・。」

「言い訳はいいの。こら、ジャイ吉寝るな。」

のび労はジャイ吉の頭を小突いた。

「ふあ・・・。おはよう。」

「『おはよう。』はいいから、真面目にやれよ。しょうがないな。」

近くで黄のストレートセミショートヘアをツインテールでまとめた女の子が笑っている。

「のび労くんは毎日大変ね。」

「いやね、菜秋ちゃん。毎日ってわけじゃないんだ。たまにたまに。」

のび労は頭を抱えている。図書委員もくすくす笑っている。

下校　校庭

勉強会の後、スネタとジャイ吉はのび労に呼び出された。

「のび労の奴、こんなところに呼び出してなんだろう。」

スネタは畑の場所の近くに来ると横から水をかけられてずぶ濡れだ。

「冷たいよ～。ワ～～～～ン！おじい様のお古の服が濡れちゃったよ～～～！」

「のび労、酷いぞ！」
ジャイ吉はプンプンだ。
「まあまあ、これあげるから怒るなよ。」
のび労は白い箱を渡す。受け取ったジャイ吉は開けると、蛇を玩具が出てきてジャイ吉は気絶した。
数分後、金色の満月シニヨン系のツインテールの娘と同色のハーフアップの娘そして桃色の尖りシニヨン系の幼女が出てきて騒ぎはなんとか治まった。それが、うさぎたちだった。

数分後　野比家のマンション
うさぎ達はスネタ達を家まで送り届けて、のび労のマンション3階の１０２号室に到着した。
「此処がアンタの家か？まもちゃんのマンションとは違ってシンプルだわ。」
「うさぎちゃん、それ聞いたら衛さん落ち込むよ。」
「まあまあ、のび太くんたちに会えるなら何処でもいいじゃないか。」
「早く、入ろうよ。ドラちゃん達、待っていることだし。」
「なんか知らないけど、中にどうぞ。」
のび労は一行を家に入れる。

玄関
「ただいま。
さあさあ、ご遠慮なく。ゆっくりしていって。」
「おかえりなさい。のび労遅かったわね。お客様でも来たの？」
台所からきれいな女性が出てきた。
「ママ、ただいま。おじいちゃんとおあばあちゃんのお友達が来ているの。」
「あらまあ、遠いところから態々といつも舅と姑がお世話になっておられます。さあさあ、どうぞ。ちょっと、汚いところですが、

ごゆるりと。」
「それじゃ、お邪魔します。」
うさぎ一行は野比家に上がりこむ。
「意外と親切なんだ。のび労くんは。」
「ちょっと、美奈子ちゃん。」
「女の子や目上の人に親切にしなさいってママに教わったんだ。」
「偉いね。のび労君は。」
「いやー。」
のび労はうさぎ達を部屋に案内した。

のび太夫婦の部屋
のび労はノックをした。
「どうぞ。」
初老の女性は許可をした。のび労たちは入ってきた。
「ただいま、おじいちゃん。おばあちゃん。お友達がおじいちゃん達に会いに来ました。」
「お友達？」
尋ねたのはメガネの初老の男性だった。
「貴方が、のび太くん？」
「そうだよ。おお、誰かと思ったらうさぎさんじゃないか。」
「お久しぶり。しずかよ。」
「こちらこそ、御無沙汰ね。しずかちゃん。」
「ちびうさちゃん。」
しずかとちびうさは抱き合っては大喜び。
「やっぱり、おじいちゃん達知り合いだったんだ。」
「そうなの。私達若い頃に知り合ったのよ。」
「いやー、懐かしいな。君達は年を取ってしまったというのに。」
「また、こうして会えるなんて久しぶりだよ。」
仲良し気分ののび太たちに和んでしまったのか。
「そうだ、僕お茶菓子を持ってこなくちゃ。

ちょっと、待ってて。」
のび労は台所に行こうとするとうさぎに止められた。
「御菓子ならここにあるよ。」
うさぎはリュックから御菓子を取り出した。
「どうしたの。この御菓子？」
「どうせ進吾くんから、くすねてきたものでしょう？」
うさぎは笑う。
「あはははは、どうしてばれちゃったの～？」
「まるみえよ・・・。」
ほたるはきゃっきゃっと喜んでいる。
その時、母がお茶を持ってきた。
「お茶が入りましたよ。」
「はーい。ありがとう、ユカリちゃん。」
母親はユカリと云う名前だ。
その時、また誰かが入ってきた。
「ただいま。」
「パパおかえりなさい。」
「お帰りノビスケ。早かったな。」
父・ノビスケは今日は早めに仕事を終わらせたらしいのだ。
「お邪魔してます。」
うさぎ達はごあいさつをした。しかしノビスケは顰め面で。
「パパ、誰だよ？この小娘たちと親子連れは？」
うさぎはムッとした。
「アタシたちは、のび太おじいちゃん達のお友達よ。失礼なおっさんね。」
「ふーん。あんたらがねえ～？」
「ちょっとノビスケ。」
ノビスケは話を逸らして、のび労に話しかける。
「のび労、お前にお客様が来ているぞ。」

玄関

お客はのび太の友人のスネ夫とその息子でノビスケの友人のスネ樹と孫の今度の被害者のスネタだった。スネタはしくしくと泣いている。

「あら、スネ夫さん。どうしたの？」

「いや、しずかちゃん。あのね、孫のことでお話があるんだ。」

「スネ樹くん、お久しぶり。」

「暫くだね。」

「ええ、あらどうしたの？スネタくん。」

「さてはまたのび労が苛めたのね。」

「まったくもう。のび労、ちょっとおいで。」

「いえ、怒りに来たんじゃないんです。単なるお話し合いに来たんです。」

「まあ、どちらにせよ。ちょっと、ゆっくりしていってください。」

うさぎ達一行は奥から覗いた。

「スネ夫くんだわ。」

「何しにきたのかしら？

なんにせよ。お説教じゃなくてよかった。」

ホッとうさぎたちであった。

「それにしても、あのノビスケっておっさんはムカつく～。のび太くんとは正反対だわ。」

ノビスケはのび太と正反対でかなりの腕白だ。さすがのうさぎ達も頭にきてしまう。

のび労の部屋

のび労の部屋は若い頃ののび太やノビスケと違って綺麗に片付けてある。綺麗好きで家事万端は母と祖母譲りだ。

「スネタ、今日はなんの用だ。仕返しじゃないだろうな？」

「そんなんじゃないよ。お父様とおじい様がのび労に鍛えてもら

いなさいっていったんだよ。」
「そういわれてもなあ。」
床に鈴カステラみたいなボールが転がっている。スネタはそれを拾った。
「これなんだろう？」
「さあ？
そうだ、さっきのお詫びとしてこれをプレゼントにする。」
「ええ、いいの。」
「いいの。いいの。」
「それじゃ、ありがとう。」
スネタを大喜びで部屋を出て祖父や父に見せて、マンションを後にした。
ところが苛めのことで祖母にこってりと油を絞られた。
「アンタって子は～！苛めちゃいけないってあれほど、言ったのにまたやったの！幸いはうさぎお姉さんが止めてくれたから良かったようなものの、なんてことをするの！」
その時、机の引き出しがカタカタ揺れて、中からだるまのようなロボットが出てきた。
「はあ、やっと着いた。」
「ドラえもん。」
「ドラちゃん。」
「わあ、机の引き出しから妖怪が出た！」
「誰が妖怪だ！未来から来たロボットのドラえもんだ！」
引き出しの中から海野やゾイサイトに似た声が聞こえてきた。
「ドラえもん、早くしろよ！」
続いて親父くさい声がした。
「我輩たちも出たいでアル～～～！」
可愛い声がした。
「お兄ちゃん、出てよ。」
真面目くさい声がした。

「そうですよ。せっかくの任務なんですから。」
面白い声もした。
「何時まで穴から顔だけ出してんだ！」
子供っぽい声がした。
「ねえねえ、何時に着いたの～～～？」
狼の鳴き声がする。
「がうー。」
「あっそうか。ごめんごめん。」
ドラえもんは出ると、カウボーイ風の黄のネコ型ロボット、桃のアラビアンファッションのネコ型ロボット、赤いリボンを耳代わりにし黄のたネコ型ロボット、カンフー系の橙のネコ型ロボット、耳の変わりに角を生やしたスペイン風のネコ型ロボット、サッカー少年みたいな服装をした黄緑のネコ型ロボット、そしてロシアの衣装を纏った狼みたいな茶のネコ型ロボットが出てきた。
「あああああ、全くオメエってアホは・・・。」
「ごめんごめん。」
ドラえもんズとドラミが野比家に訪問してきたのだった。
「久しぶりだね。ドラえもん。」
「ドラミちゃん。お久しぶり。」
ドラえもん兄妹とのび太夫婦は大喜び。
「だあだあ。」
ほたるはドラえもんズとの再会で大喜び。
「元気にしてたか？ほたる。」
「ドラえもんって、おじいちゃん達と大の仲良しのロボット。」
のび労は初対面だった。
「そうだよ。ドラミちゃんもキッドも王ドラもドラニコフもドラメッドもマタドーラもドラリーニョもみんなおじいちゃんの友達なんだ。」
「みんな、元気だった？」
「元気だよ。」

「お義父さん、お義母さん。苑子達は誰？」
ユカリは初対面だった。
「これが、パパの言っていたドラえもんズか？」
ノビスケはドラえもんやドラミちゃんは知っているがドラえもんズは知らないようだ。
「僕、のび労。よろしく。」
「こちらこそよろしく。」
のび労はドラえもんズとすっかり仲良くなった。
そこへ、'' スモール・レディ～～～！'' とうめき声がした。
ちびうさは思わず身震いをした。
引き出しから3匹の猫が出てきた。そのうち1匹はムスッとしている。
「やっほ～。うさぎちゃ～～～ん。」
「のび太くん、しずかちゃん、久しぶり～～～。」
「ルナにアルテミス。」
「それにダイアナ～～！なんで此処に～～～！？」
「こいつらか？此処に来る来る途中で２０世紀に寄ったんだ。どうやらお前らに会いたいらしくてついてきたんだ。」
「スモール・レディ、酷いです！私たちを差し置いて２１世紀に行こうとするなんて！探しに行ってみたら間違ってこの時代に来てしまって～！」
その時、引き出しから若い男性の声がした。
「お～～～い、待ってくれ～～～～～。」
引き出しからタキシード仮面が出てきた。
「タキシード仮面様も来てたんですか！？」
「まあな。ははは・・・。」
「あの、どちら様？」
のび労は初対面だった。
その時、ノビスケがタキシード仮面に突っかかってきた。
「こら、怪しい男！何者だ！」

タキシード仮面はドロボウに間違えられてしまったようだ。

スネタの家

裕福なスネタの家でスネタはのび労のプレゼントに興味を持つが結局何故のままだ。

開けようにも蓋のようなものは見当たらないのだ。調べてみるうちに上半分が動き出した。それが蓋だったのだ。

蓋を開けるとドラえもんより一回り小さいドラえもんに良く似たロボットが眠っていた。ロボットは目覚めるなりスネタに懐いた。どうやら遊びたがっているのらしいのだ。

のび労（後書き）

ノビ労くんのママは美人でした。
これから私は、お出かけに行ってきまーす。
（数時間後）
お待たせしました。のび労君達が次回から大冒険します。

ミニドラと遊ぼう（前書き）

ミニドラえもん（略してミニドラ）がどうして此処にきたのか此処で秘密を明かします。
ミニドラは前回はノビスケクンたちと冒険をしましたが、今作ではのび労くんたちと冒険します。

ミニドラと遊ぼう

時空界
タイム宅配便のゴンスケはタイムバイクでお届け物をしている。
「ここだったっべか？」
【此処じゃないようです。】
タイムマシンはまっすぐに進む。
「こっちかな。それにしても依頼主さんの字は丁寧だけど、下手な字だな。」
【ここでもありません。
２０１１年じゃありません。】
「もうこうならりゃヤケだっぺ。」
【だめです・・・。】
「いいの！
ほれ、野比のび太さん、お届けものだべ～～～！」
ゴンスケは鈴みたいなボールを投げた。
「ささ、次の仕事だべ。」
ゴンスケは仕事に戻ってしまった。

２１世紀後期
机の引き出しからボールが出てきて床に転がった。ボールは部屋の主の友人の手に渡る事になった。

午後　ジャイ吉の店
社長の祖父と副社長の父はある会議のために出かけておりその間はジャイ吉のスーパーでゆっくりすることになった。スネタは店を訪れた。
「ごめんください。」
店から店長のジャイアンこと武が出てきた。

「おおいらっしゃい。スネタ君。おや、それはドラえもんじゃないか。」
スネタの頭に小さなネコ型ロボットが乗っている。どうやら彼にとても懐いているようだ。
「ドラえもん？」
「おじいちゃんの友達の家に居候していたネコ型ロボットだよ。」
そこへ父のジャイチビことヤサシが出てきた。
「父ちゃん父ちゃん、僕これから配達に行ってくる。」
「おおいってらっしゃい。」
入れ違いにジャイ吉が出てきた。
「じいちゃん、ドラえもんって？」
「なんだ、聞いていたのか。お腹のポケットからいろいろな道具を出すんだよ。中でも探検道具は実に面白い。それで冒険もしたんだよ。でも、狸に間違えられるのが唯一の欠点なんだよ。」
「確かに、こいつ狸みたいな格好をしている。」
確かにドラえもんそっくりだ。そのロボットはプーと膨れる。
「あはははは・・・。ごめんごめん。冗談だよ。」
「どうしたんだい。それ？」
「のび労に貰ったんです。それとなんかそいつが入っていた箱の中にこれもあったんです。」
スネタはポケットから紙と書物を取り出した。ジャイアンはそれを受け取った。
「なになに？
『親愛なるのび太くんへ
ドラちゃんとのその後の生活はどうですか？
もしかしたら、邪トリオに苛められているかもしれないかもしれません。』
邪って俺達のことかよ。失礼な。
『なので、ドラちゃんの補助役として未来デパートで仕入れてきたミニドラを献上いたします。

説明書も一緒に入っています。
なので、説明書を良く見て上手に扱ってください。
２２世紀のネオ・クイーン・セレニティより。』
だって。」
「ネオ・クイーン・セレニティって、誰？じいちゃんの友達？」
「まあ、そんなところかな。そうだ、じいちゃんはこれからセレニティの城に行ってくるから。
そのミニドラと遊んでいてくれ。夕方までに戻るから説明書をよく読んで上手に扱ってくれ。それじゃ行ってきます。」
「じいちゃん、行ってらっしゃい。」
ジャイアンはクリスタル・パレスに向かった。
「ミニドラって言うのか。それにしても、一生懸命だけど、下手な字だな。子供にとっては読みやすい字だよ。」
確かに贈り主の字は子供にとっては判りやすい字だった。スネタはもう１枚の紙に気付いた。
「あれ、なんだろう。
『追伸
しずかちゃんとの関係は上手く進んでいますか？
彼女によろしくお願いします。』
だって。」
「ドラドラ。」
ミニドラは頷いた。
「説明書ってこれだよね。えっと・・・。なるほど、スモールライトとかミニライウンとか出せるのか。」
「だったら、ちょっとの間冒険でもしてみようか。」
「ねえ、ミニドラ。ちょっと、お散歩に・・・・。」
いつの間にかミニドラはトンズラをこいてしまった。
ミニドラは奥のデパートの倉庫に向かっていく。ジャイ吉達は追いかけていった。
「「待ってよ～～～！！！」」

倉庫
足の速いミニドラは倉庫に入るなりある大きなダンボールを荒しまわった。追いついたジャイ吉とスネタは深呼吸した。
「追いついた〜〜〜〜。お前、まさかどら焼きが食べたいの？」
「ドララ〜〜。」
「どら焼きあげるから、お前ちょっとどいてて。」
スネタはミニドラを引き離した。ジャイ吉はダンボールから数個入ったどら焼きを何袋も出した。
ミニドラは飛びつくが、スネタにダメと取り上げられた。
「どら焼きのことは父ちゃん達には内緒だよ。」
「家の中で食べようよ。」
「ドララ〜！」
ミニドラは大喜びだ。

ジャイ吉の部屋
机の上でミニドラはどら焼きをたった一口で食べた。呆気に取られるスネタ達の前に腹部のポケットに両手を入れた。
「どら焼きを1つあげると道具を出すんだ。」
「そうだ、外の様子を伺える道具がほしいな。」
ミニドラはピンクの小さなドアを出した。スネタは説明書を見た。
「あれ、これって何処でもドアだよね。これで外の様子見れるかな？」
「ドララ。」
ミニドラは頷く。ジャイ吉はドアを開けると何か風景が見えている。かなり小さいので潜り抜けるのは不可能だが、外の様子なら見れるのだった。
「ホントだ。あれ、あそこはのび労のリビングだ。」
「ええ。」
スネタはジャイ吉と交代してリビングを覗いた。ドアの外から声

がした。
野比家のリビング
「ミニドラ？」
うさぎ達はリビングで話をしている。
「リニョちゃん、ちゃんとミニドラの管理はしなさいよね。」
ドラリーニョはムッとした。
「僕のじゃなくて、未来デパートで販売されているミニドラだよ！」
「私たちもそのことを聞かれてドラ様たちと御同行していたのです。」
ダイアナたちは、ドラえもんズ達とミニドラの捜索に来ていた。
「そういえば、前にもこんなことがあったな。」
「ノビスケの時は、パパのせいで散々な目にあったな。」
「いいな。いいな。」
「ゆかりさん。」
ノビスケによってボロボロになったタキシード仮面は叱咤した。
「そのミニドラこっちに来てなかった？」
「いいえ。」
「来てないわよ。」
「変ね。宅配分の人に聞いたらこの時代に間違って来たって情報が・・・。」
王ドラはうさぎ達をジト～っと睨んだ。
「そういえば、貴方方どうしてこの時代においでになってるんですか？」
「実はこの時代でいうと私達親子は引越しをすることになったから、その思い出としてのび太くんたちのいる２１世紀前期にいこうとしたんだが・・・。」
「間違えてこの時代に来ちゃったのよ。」
「なるほど。」

「それなら納得。」
「変ね。いつもならプーは絶対に間違えた時代に通じたりしないのに・・・。」
「失敗は誰にでもあるよ。」
しずかは話を戻そうとした。
「どうして、そのミニドラが間違って此処に贈られたの？」
「簡単だ。２２世紀のネオ・クイーン・セレニティが原因だ。」
「今の姿のうさぎのことじゃねえぞ。」
「がう。」
ドラニコフは頷いた。うさぎは？と思った。
「そのネオなんとかが如何したの？」
のび労が質問するが、しずかに。
「のび労。苛めの罰として夕食ができるまで部屋にいなさい。」
「は～い。」
のび労はリビングを追い出されてしまった。出る時に何かを感じたのだ。
「それで、２２世紀のママがどうしたの？」
「実は、あのミニドラはセレニティが勝手に仕入れて１０代前半時ののび太殿に贈ろうとしたのだが、字が下手であったからコンピューターが読み違えてこの時代に転送されたんでアール。」
「僕に？」
「そうだよ。」
「それで、ミニドラを探しに此処に来たの？」
「そういうことだよ。」
「全く、何年経ってもうさぎのドジや頭の悪さは殆ど変わらないんだから。」
レイの嫌味でカチンときたうさぎはレイと大喧嘩になった。

のび労の部屋
のび労はあのボールのことを思い出した。

「まてよ。そういえばあのヘンなボールがあったんだけどあれがミニドラかもしれない。」
のび労はこっそり縄梯子をベランダの柱にとりつけてあらかじめこっそり持ってきた靴を用意してマンションを抜け出した。

ジャイ吉の部屋
ジャイ吉はドアをミニドラに返した。
「スネタ、聞いた？」
「このミニドラ間違って此処に配達されたんだって。」
「どらら～。」
ミニドラは再びどら焼きを食べようとするが、スネタに抱えられて。
「どうする？このままあの人に返しておく？」
彼らはうさぎ達の話を聞いてしまった。

リビング
ケンカを中断させたうさぎは何かを思い出した。
「そういえば、あののび労君がスネタくんにボールみたいなものをあげたようだけど、あの中にそのミニドラが入っているんじゃ・・・。」
「なぬ？」
「お前らそのボールみたいなものを見かけたのか？」
「ええ。」
ドラえもん達はため息をついた。
「実はそのボールみたいなものはミニドラのケースなんだ。」
「もし、誰かに使われたら・・・。」
「うさぎのせいになるんでしょ・・・。」
「そうそう。うさぎちゃん、ドラえもんより数倍ドジだから。」
うさぎとドラえもんは怒り出した。
「何よ、それ！」

「余計な事をいうな！」
ドラミは止める。
「ケンカはいいわよ。とにかくミニドラを探すのよ。」
「でも、どうやって？」
キッドは提案を出した。
「簡単だよ。ドラミ、ほたるを本来の姿に戻してやってくれ。」
「判ったわ。ほたるさん、いらっしゃい。」
教授はドラミにほたるを渡した。ドラミはお風呂場に向かう。

数秒後
お風呂場から出てきたドラミの横に１０代前半のほたるがいた。
ほたるはタイム風呂敷で本来の姿にまた急成長を遂げた。洋服はドラミの着せ替えカメラで着替えたものだ。
「お待たせ。」
「ほたるさまを、急成長させていかがなさいます。」
「決まってるじゃん。サイレンス・グレイブでミニドラの居場所を探すんだよ。」
「そういえば、敵にさらわれたドラミちゃんを助けに行ったときにサターンのサイレンス・グレイブで探し当てたもんね。」
うさぎは、無邪気な笑みを出し。
「思い出したわ。あのときはロマンチックな体験だったわ。ドラミちゃんやキーちゃんにとって。」
キッドとドラミは顔を真っ赤にしたがドラえもんは複雑だ。
「あれは、思い出しただけで腹が立った。」
「全く、兄バカなんだから。」
「妹想いと言え！」
うさぎとドラえもんのケンカにユカリは仲裁に入った。
「まあまあ、とにかくそのサイレンスなんとかで探し出せばいいんじゃない。」
「そうしましょう。」

そのとき、ちびうさのリュックからムーン・スティックの反応がした。
「ムーン・スティックが。」
ちびうさはムーン・スティックをとり宝石を指で擦った。宝石から声がした。プルートの声だ。
「プー。」
〈スモール・レディ。申し訳ございません。私時空を間違えてしまいました。〉
「やっぱりだ・・・。」
ちびうさは苦笑いした。
「いいのよ。おかげでドラちゃんやのび太くんたちにまた会えたんだから。」
〈よかったのですね。
それより、３０世紀で大変なことが起こりました。先日の沈黙事件のＤｒ．アチモフが脱走をいたしました。〉
「何ですって！？」
「あのおっさんが！」
〈彼はなんらかの方法で脱走してしまいどこかの時代に行ってしまったのです。〉
「そんな。プーでも居場所は掴めないの！」
〈残念ですが、その通りです。〉
「そんな。」
亜美は考え込んだ。
「もしかしたら、その人はこの時代に来ているのかもしれないわ。」
「そんな。どうしよう。」
〈諦めてはいけません。なんとしてでも彼を止めるのです。〉
「判ったわ。」
〈それでは後ほど。〉
ちびうさの返事の後に通信は切れた。

「また、使命が重なりましたね。」
「全く、あんたって子は。」
「だから、現在のあたしじゃないってば～～～！」
「とにかく、早く先にミニドラを探しましょう。」
「そうだよ。」
「よーし、みんな行くぞー！」
張り切るうさぎに王ドラが突っ込んだ。
「貴方が指揮してどうするんです？貴方が・・・。」
「煩いわね。そんな性格だから短い足を改造してもらえないでしょうが・・・。」
王ドラはカチンと来てうさぎと大喧嘩になった。
「パパ並みのドジだ。」
「ほっといてよ。」

ジャイ吉の部屋
「そうしたいのは山々だけど、おじいちゃんが遊んでいろって言われたし。あのお姉さん達とゆっくりと相談したほうがいいんじゃない。」
「あの、うさぎさんって言う人がそう簡単ＯＫしてくれるかな？」
その時、がらりととが開いてこの家のモップを片手にしたのび労が睨んでいる。スネタたちは、さーっと冷や汗をかいた。
「あの話を立ち聞きしてたな～～～～～！」
のび労たちの大騒ぎは数分間続いた。

数分後
騒ぎは収まり、ミニドラはのび労にも懐いてしまった。
「なるほど、ミニドラの何処でもドアでさっきの話を聞いていたのか。」
スネタたちはボロボロだ。
「これは、ドラえもん達に返しておかなくちゃ。っといいたいと

ころだけど。面白そうだから冒険にでもいこうか。」
「やったー。」
とうとう3人はミニドラと冒険をすることになった。
その時、ナイフを鞘に入れてさげた身軽な青年が窓を叩いた。
「はい。」
ジャイ吉は窓を開けた。
「こんにちわ。坊や達お兄さんは旅の人なんだ。」
「旅の人？」
「そう。」
ミニドラはその青年に敵意を表さずにうれしそうに抱きついた。
「おやおや。」
「ミニドラが気に入ってるから、この人は信頼できるよ。」
青年はミニドラを抱き上げた。
「お兄さんはどうして旅をしているんですか？」
「無くしたものを探してるんだ。」
〜無くしたもの？まさか、記憶じゃ・・・。〜「何を探しているか知りませんが、僕たちも手伝います。」
「ちょっと、のび労。」
「大丈夫だよ。
僕達、これからこのミニドラと一緒に冒険をしたかったところなんです。」
「ミニドラっていうのか？
ぼくは・・・・。誰だが判らないんだ。特に名前が・・・・。」
〜やっぱり。〜「僕は、のび労。友達は、スネタとジャイ吉です。」
「「よろしく。」」
「こちらこそ。」
3人は握手を交わした。
「それにしても名無しだと可愛そうだから。ゼノンっていうのはどうかな？」

「ゼノンか。うん、気に入った。」
「よろしく。ゼノン。」
「こちらこそ。」
「さてと、挨拶も済んだことだし。行きますか。」
『オー！』
「ドララ～！」
ありったけのどら焼きも所持した記憶喪失の青年・ゼノンを加えた一行は冒険に向かうのだった。

ミニドラと遊ぼう（後書き）

そんなこんなで冒険が始まりました。
今日はこの辺にいたします。
（翌日）
セーラーサターンを加えたセーラー戦士とドラえもん達はミニドラ探しをすることになりました。
よりにもよってアチモフじいさんが出てきてしまい大メーワクです。
はたしてのび労くんたちの運命は。

狙われたほたる（前書き）

セーラーサターンこと土萌（ともえ）ほたるちゃんは、タイム風呂敷でまた１０代前半の少女になりました。
のび労くんは不思議な青年ゼノンと大冒険することになりました。
ほたるちゃんの活躍がまた見られます。

狙われたほたる

公園

ほたるはミニドラを捜索している。万が一ミニドラが慣れない人の手に渡ると、とんでもないことが起こるらしいのだ。

「どこに行ったのかしら？スネタくん。ミニドラはあの子が持ってるから、大変なことが起こるから取り上げないといけないわ。」

ミニドラを探すには全員一緒だと見つかり難いから分かれて探すのがいいと王ドラが提案したのだ。本当だったらサイレンス・グレイブで探すはずだったが、ややこしいので分かれて探す結果になったのだ。

「確かに王ちゃんの言うとおりだったわ。」

そこに不思議な青年がほたるのまえに姿を表した。

「こんばんわ、可愛いお嬢さん。どうかなさいましたか？」

「いえ、ちょっと探し物をなさっているのです。」

ほたるは綺麗な青年に戸惑ってしまった。

空き地

ちびうさは土管の上にリュックを置いて、中からスタリオン・レーブを出した。レーブが光り、中から一角獣みたいなペガサスが覗いている。

「久しぶりだね。ちびうさちゃん。」

「ペガサス、こんばんわ。

あたしね、貴方に会うちょっと前にほたるちゃんっていう女の子にあったの。ほたるちゃんは土星の戦士で、戦士になる前から不思議な力を持っているの。そのほたるちゃんにもペガサスのことはいってないけどね。」

「だよね。ばれたらあいつ等に見つかるから？」

「あいつ等？」

「いや、こっちの話。それより万が一セーラームーンなしで敵と戦う時にキミに新しい力をあげなければいけないんだ。なにか、便利なアイテムを持っていない？」
「あるよ。」
ちびうさはムーン・スティックを取り出した。
「万が一、僕が現れたらそれを僕に翳してくれ。」
ペガサスはそれだけいうとレーブは消えた。
ちびうさは、レーブをリュックに詰め込んだ。そのとき、ほたるがきれいな青年と歩いているのを発見した。
「ほたるちゃんだ、あの人だれだろう。
いけない。こっちにくる。」
ちびうさは土管の中に身を潜めた。二人は土管の上に座る。
「えっと、君のお名前は・・・。」
「ほたるです。土萌（ともえ）ほたるです。」
「ほたるちゃんか。僕はゼオン。」
ゼオンという青年はほたると話をした。
「すいません。探し物のお手伝いをさせてしまって・・・。」
「どういたしまして。それよりそのミニドラっていうのは・・・。」
〜ほたるちゃんたら余計なことをなにしてるのよ。〜
「わたしの知り合いが間違って違う人の家に転送してしまったのです。あの人、かなりオッチョコチョイなので。」
「ははは。随分と個性的な人だな。」
「ホントに。」
二人は笑いあう。
〜ほたるちゃんたら。〜
「ほたるちゃんは、何か夢とか特技とかないの？」
ほたるは恥ずかしそうに下を向く。
「夢か。私は、いつも学校ではいじめを受けているんです。化け物呼ばわりされたり、消えろなんていわれたり。だから、夢なんて

あまり考えられなかったんです。
　でも、そんなときある小さな女の子が私に手を差し伸べてくれたんです。彼女だけは私を怖がらずになついてくるんです。」
「よほど、怖いもの知らずの子なんだ。まるで夢を持っているような子だな。」
「わたしもそのこのように夢を持てたらいいなと思いました。でも、ようやく夢を探すことが出来ました。」
「そうか、君も夢を見つけられたのか。」
〜ほたるちゃん、あたしのことをほめているんだ。〜
その時、チェシャ猫みたいな目がちびうさと向かい合っている。
［スモール・レディ〜〜。］
［わ、王ちゃん？何してるの？こんなところで。］
王ドラが土管の中に隠れていたのだ。
［土管の中に隠れていたんです〜。］
［いつからいたの？］
［スモール・レディが来る前から隠れていたんです〜。
　ところでペガサスと何で連絡を取っていたんですか？とぼけてもだめですよ。お話は全部聞こえちゃいましたから。］
「ちびうさちゃん？」
いつの間にかほたるが土管の中を覗いていた。
「わあ、ほたるちゃん。」
「おや、お友達がいるのかい。」
ゼオンの前にマントがおりてマントが上がると服が変わった。
「そんな。王ちゃん、うさぎさんに知らせて。」
「判りました。」
「ゼオンさん、貴方は一体？」
「1！」
地面から板が出てほたるの背に張り付いた。
「2！」
板から鉄の輪が出てほたるの手足を縛めた。

「3！」
「キャーーーーー！」
ほたるの体内から鏡が出てきた。
「ほたるちゃん！」
「こんにちわ。可愛いおじょうさん。僕はゼオライト。アマゾネスの一員だよ。」
「アンタもあのオカマたちの仲間なのね。」
「ひどい子だな。おいで、僕のレムレス。月の騎士、ツキコ。」
ゼオライトは影からアラビアンダンサーの衣装を纏った騎士風の少女を召喚した。
「ツキコ〜！」
「ちっ。」
ツキコは左斜めにかけてある。鞘付きの半月刀を左手で抜き、ちびうさに切りかかろうとした。
「ツキコ。その子をお願いね。僕は、その子の夢をみているから。」
「かしこまりました。」
ゼオライトは夢の鏡に頭を入れた。その間ほたるは苦しみだすが、頭を抜くと残念そうな表情をした。
「残念。ペガサスはいなかったよ。」
「外れでしたか。」
ほたるは気絶した。
「何が、外れよ！そんなにペガサスに会いたいなら会わせてあげるわよ！
その代わり、あたしと勝負しなさい！」
再び王ドラがにんまりしてきた。
「スモール・レディ〜〜〜。なんか大事な事を忘れてはいませんか〜〜〜〜？」
後を向くとうさぎが立っていた。もちろんドラえもんも一緒だ。
「ちびうさお待たせ。」

「王ドラから連絡が入ったんだ。なんかとんでもないやつが来たんだと。」
「このひとがそのとんでもない人ですよ。なんかスモール・レディが知っている・・・むぐ。」
ちびうさが王ドラの口を塞いだ。
「それよりなんとかしてほたるちゃんを助けなきゃ。」
「でも、どうする。ここで変身なんかしていいの。」
「しょうがないよ。ここでほたるちゃんをほっておけないし。」
「ドラちゃんに賛成。いつか敵にばれちゃうことだし背に腹には代えられないよ。」
うさぎも納得したのか。諦めて戦闘態勢に入った。
「それじゃ、ちびうさ。」
「うん、うさぎ。」
二人は新しくなった変身ブローチを掲げた。
「「ムーン・クライシス！メイクアップ！」」
うさぎはセーラームーンに、ちびうさはセーラーちびムーンになった。
「聖杯がなくても一篇で変身した。」
ほたるは息を吹き返した。
「・・・ち・ちびうさちゃん・・・。」
「おやま、こんな別嬪なお嬢さんたちが、変身した。」
「御感想はありがたいけど、純粋でいたいけな女の子を襲うなんていけないことよ！」
「大切な友達、ほたるちゃんを傷つけるなんてあんまりでしょう！」
「愛と正義の！」
「セーラー服美少女戦士！」
「セーラームーン！」
「セーラーちびムーン！」
「月に代わって！」

『お仕置きよ！』
「また、あの技使うんですか？」
王ドラの質問にムーンは首を振る。
「もうその技使いません。」
「だよね。」
「お取り込み失礼ですが・・・。」
何時の間にかツキコが剣を振り上げてきた。セーラームーン達は避ける！
「なんなんだ！こいつらは！」
「あるサーカス団の指揮するレムレスよ！こいつらそんじょそこらの怪物とは訳が違うのよ！」
ツキコの攻撃にムーンたちちは避けるばかりだ。
「こうなったら、二手に分かれて行動しましょう。片方はあの青年を。もう片方はあのレムレスとか云う怪物をやっつけるんです。」
「それで、ほたるちゃんは？」
ちびムーンの問いに王ドラはチーンっと黙ってしまう。
「隙あり！」
セーラームーン・王ドラ・ドラえもんはツキコの放った数本の刃の短い満月刀によって地面に貼り付けになった。
「参ったな。これじゃ、動けない。」
「そんな～！」
「如何するんですか？これ。」
ツキコがムーン達に刀を突きつけようとする。
「さ～てと。誰から片付けちゃおうかな～？」
「セーラームーン、王ちゃん、ドラちゃん！」
ちびムーンは駆け寄ろうとしたが、ほたるはゼオライトに人質に取られてしまった。ゼオライトはナイフをほたるの喉笛に当てた。
「お嬢さん、ちょっとでも動いたらこの子の命はないよ。
そうだ、お嬢さんは確かペガサスに会わせるといったよね。」
「そうだよ。今、此処であわせてあげる！」

ちびムーンはハート型の輪のついた鈴・クリスタルカリヨンを出した。
「そんな鈴で敵と如何戦うんですか！」
「黙って見ててよ！いい、行くよ！
お願い、ペガサス！みんなの夢を守って！
トゥインクル・エール！」
上空に光が現れ、ペガサスが舞い降りる。
「こんな時にペガサスを呼んで如何するのよ！人がどんな状態でいるか考えなさい！」
〜私達はロボットですけど・・・〜
「角を生やしたペガサスなんて初めて見た！」
「これが、ペガサスか。」
ペガサスはちびムーン前に寄る。
「セーラーちびムーン。ありがとう。僕を呼んでくれて君に取って置きの力を授けよう。ムーン・スティックとカリヨンを翳して。」
「判った。」
「ちょっと、ちびムーン。僕たちはどうなるのさ。」
ドラえもん達はまだ動けないのだ。
ちびムーンはドラえもん達を無視してムーン・スティックとカリヨンをペガサスに翳した。
ペガサスの角は光り、カリヨンとムーン・スティックも輝いた。
ムーン・スティックとカリヨンは融合して弓矢になった。
「わあ、弓矢だ。」
「これは、セイント・ムーン・アロー。闇の力を消し去る弓矢だよ。それをレムレスに向かって放つんだ。」
「判ったわ。」
「ツキコ！先にこの子をやってあげて！」
「はい！」
ツキコは半月刀を持ってちびムーンに突進しようとした。
「ちびムーン！」

「ちびうさちゃん！」
ちびムーンはムーン・アローをレムレスに向ける。
「ムーン・プリンセス・ドリームライト！」
光の矢を放つ。光の矢はツキコに命中した。
「ステージ・アウト！」
レムレスは影になった。セーラームーンを捕えていた剣も消える。
「助かった～。」
「よかった～。」
ちびムーンは弓矢をゼオライトに向ける。
「次はアンタよ。一体、アンタペガサスをどうするつもりなの？答えなさい！」
彼はとてもくやしくなり。
「なんて子。ただの子供じゃなかったんだ。
此処は、退却しなきゃ。」
上空に渦のような光の輪が出てきてそこに飛び込み同時に輪も消える。後に板と鉄の輪が消え鏡もほたるの元に戻りほたるは再び気を失い、解放された。
ちびムーンの弓矢はカリヨンとムーン・スティックに再び分離した。ちびムーンはほたるに駆け寄る。
「大丈夫、ほたるちゃん？」
「大丈夫。ありがとう、ちびムーン。」
「どういたしまして。」
彼女達の会話に王ドラとムーンが割り込んだ。
「『如何いたしまして。』じゃないでしょうが！」
「全くこんな時にペガサス呼び出して。少しは状況を考えなさい！」
ムーンはちびムーンの頭を思いっきり拳で叩いた。
「イッタ～～～～！そんなに強く叩かなくていいでしょうが～～～～！」
「大体、なんなんですか！そのペガサスというのは！」

「何でもいいでしょう。それより今はほたるちゃんの安静が先よ！」
ムーン達はちょっとの間、空き地で休養を取ることになった。

数時間後
ほたるの容態も略よくなった。
うさぎとドラえもんは引き続きミニドラの捜索に当った。ペガサスはまだ王ドラたちに傍にいたのだ。ちびうさからペガサスのことを話すまで此処にいるように言われたからだ。
「そのペガサスというのは、一体何者なんです？何故、アマゾン何とかがそのペガサスを狙っているのですか？」
冷や汗かいたちびうさの代わりにペガサスが答えた。
「僕の力を利用して世界を闇にかえようとしているんです。それを阻止できるのは僕の力を有効に使ってくれる人を探してるんです。そんな時にこの子と会ったんです。この子ならきっと僕の力になってくれると思って。」
「それでちびうさちゃんに。」
「あたしも詳しいことは良く知らないけど、ペガサスがあいつらに狙われていることは確かなんだ。
ペガサスと心を通い合わせた時に貰ったのがこのレーブなんだ。」
ちびうさはレーブを王ドラとほたるに見せた。
「なるほど。うさぎさんたちにも内緒にしているんですか？」
「そうだよ。ペガサスの件はうさぎたちに内緒だよ。」
「なんだかよくわからないけど、判ったわ。」
「そういう事情でしたら内密にはいたしますが、レーブはちょっとの間は私が預かってきます。」
「判りました・・・。」
レーブは王ドラに預けられることになってしまった。当分はペガサスと連絡が取れない身であった。

ペガサスは嬉しそうな表情を見せ、空へ舞い上がった。

狙われたほたる（後書き）

ちびうさちゃんはしばらくは角の天馬・ペガサスと連絡が取れなくなってしまいました。
ミニドラは一体どこにいるのでしょうか。

ジャンピング潜水艦（前書き）

ミニドラと謎の青年ゼノンと仲良くなったのび労君たちは冒険をすることになりました。どら焼きを１つ食べると道具を出すミニドラはのび労君たちにどんな探検道具を出すでしょうか。
一方ミニドラを探すセーラー戦士にアマゾンの青年ゼオライトが現れてしまいます。ちびムーンはペガサスから貰った武器で撃退に成功しました。でも、ペガサスのことを王ドラとほたるちゃんにばれてしまいました。おまけにレーブは王ドラに没収されてしまいました。
ミニドラは何処にいるのでしょうか。

ジャンピング潜水艦

河原

ミニドラはのび労達に河原に行きたいと言い出して彼らは河原に来た。

「河原か。いい眺めだな～。此処でどんな冒険をしたいんだろう。」

「ミニドラはどんな冒険がしたいんだろう。潜水艦でかな？」

ミニドラはのび労の腕の中でどら焼きを食べている。その後、小さな潜水艦を出した。

「何これ、玩具の潜水艦？これをどうするの？」

ミニドラはのび労の腕から飛び降りて潜水艦を押えているかのように水辺に浮かべると潜水艦は４人で乗れるに大きくなった。

「へー、広い範囲の水面に浮かべるとその範囲に合わせて大きくなるんだ。」

「ドララ～。」

「ところでこの潜水艦どうやって動かすんだろう。」

スネタは説明書を広げる。この潜水艦はジャンピング潜水艦らしいのだ。使い方も乗っていて４人にとっては。

「ふんふん・・・。ラッキー！

名前も使い方も乗ってるんだ！」

『バンザーイ！』

『ザーイ！』

潜水艦の中

幸いミニドラの潜水艦は４人乗りだったので、４人ぴったりに座れた。ちなみにミニドラはスネタの膝に乗っている。

「何処に行こうかな？」

「今度、新しくできた水族館はどうかな？」

「やめとこうよ。あそこじゃ館長に叱られちゃうよ。」
「大丈夫だよ。海の生き物がいっぱいだから目立たないよ。」
「それならいいけど。」
「じゃあ決まり。水族館へＧＯ！」
「どら～！」
潜水艦はテレポートした。

公園の池
一行は公園の池に着いた。
「あれ、此処は公園の池だ。」
「説明書には近くなら瞬間移動ができるって書いてあるから、公園まではそんなに離れてなかったんだ。」
「じゃあ、水族館まではまだ遠いんだ。」
その時、近くに可愛らしい怒り声が聞こえた。
「見つけましたよ。」
潜水艦の隣に足場があった。どうやら此処は、ボートを借りるところらしい。その上に灰色の三日月模様の仔猫が睨んでいる。
「なんだ、この三日月ハゲ！」
「三日月ハゲじゃありません。３０世紀から舞い降りた人の言葉を話す猫ダイアナです。」
「こういうのを、猫娘っていうんじゃない～～～～～！」
スネタはブルブル震えている。ミニドラは興味深そうにはしゃいでいる。
「猫娘でもありません。そのミニドラをお返しください。これは、貴方方の玩具じゃないのですから。」
のび労はスネタたち意見を求める。
「どうしよう？スネタ。」
「どうするって・・・。
こら、ミニドラなにしてるんだ。」
ミニドラは潜水艦の蓋を開けた。ダイアナを連行した。

「何なさるのです～。」
ミニドラは蓋を閉めた。
「まさか、この猫も連れて行こうっていうんじゃないだろうね。」
「どらら～。」
ミニドラは頷いた。ダイアナが気に入ったらしい。
「どうするって・・・。しょうがない。このまま水族館に行こうか。」
「それじゃ。ジャンプ。」
潜水艦は再びジャンプした。

氷のいっぱいある水中
「ひえ、寒いです～～～～。」
「まさかここ、北極！？」
その時、近くに細い棒のような広いものが出てきた。
「あわわわわ！なんだこれ！？」
水面がみるみる減っていく。
その正体は。

喫茶店
「あら、何これ？」
「どうしておもちゃの潜水艦がグラスの中に？」
どうやらのび労たちはアベックの内の男性の持っているグラスの中にジャンプしてしまったらしい。
不思議そうに見た男性の前で潜水艦はジャンプした。

他にものび労達は銭湯の女湯のお風呂の中・洗濯機の中・居酒屋のワインの中など、とんでもないところにジャンプを繰り返した。

水族館
キッド・ドラメッド・マタドーラ・アルテミスは水族館を捜索し

ている。どうせ、遊びたかったのかもしれないらしい。
「本当にセレニティはドジな女王様だぜ。」
「何年経ってもドジは治ってないんだな。」
「やっぱりうさぎが原因だな。」
「そんなことはよいから早くミニドラを探すのである。」
「ああ、そうだな。」
{本当にうさぎだよな。}
ドラメッドたちは捜索を続行した。ちなみにアルテミスはヌイグムミの振りをしている。此処では、介助犬以外のペットは立ち入り禁止になっているのだ。

スナメリのいる水槽
のび労たちはやっと水族館に到着したのだ。確かにスネタの言うとおりたくさんの海の動物がいれば、目立たないのだ。
「ふー、やっと着いた〜。」
「ドラドラ〜！」
ダイアナは膨れっ面だ。
「もう、散々でしたよ〜。いい加減にミニドラを返してください。」
「そうはいかないよ。せっかくいい友達ができたのにもったいないよ。」
スナメリの群れが潜水艦を囲んだ。人には絶対に見えないのだ。
「わわわ、来るな来るな！」
スキューバーダイビングの人が後で回収した。

館長室
のび労達は館長室でこってりと油を絞られてしまった。
「何故此処にいたかは知らないが、探検ごっこは館内でしてはだめだよ。」
「はい。」

「すいません。お詫びの印としてはなんですが、芸でもいたしましょうか。」
「芸？」
「はい。」
館長は考えて、結論を出した。
「何が、特技かは知らんが、実はスナメリ担当の調教師がほしかったところなんだ。その調教師をやってもらおうかな。」
「はい、ありがとうございます。」

イルカショーの会場
こうしてゼノンは調教師としての芸を疲労することになった。担当はスナメリだ。
輪くぐりとか、キャッチボール、そして音楽に合わせたダンスを様々に疲労した。時には、ミニドラやのび労たちも手伝った。特にミニドラとイルカのダンスはミニドラの出すムード盛り上げ音楽団（ミニドラと同じサイズ）での疲労は子供達・中でも幼女にとっては最高だった。観客席の中に見覚えのない顔がえり、ダイアナはミニドラがいることを示すためのサインをこっそり送った。

観客席
「ミニドラがあんなところに。」
「畜生、あいつらか。」
「こうなったら、ショーが終わったらダイアナ殿と力を合わせてあの４人を捕まえるである。」
「判った。」［ダイアナ・・・。］

夕方　館長室
ショーを済ませたのび労達は館長からの報酬としてありったけの美味しいどら焼きを貰った。
「いやー、君達のお陰でこの水族館のスナメリの人気は上がった

よ。これで、また冒険でもしておいで。でも、あまり人の迷惑になっちゃいけないよ。」
「はい、ありがとうございました。」
その時、館長室のドアが開き、赤いリボンを耳代わりにした黄色いロボットが入ってきた。
「探したわよ。」
「げっ！ドラミちゃん！？」
「ドラミちゃんって云うの！？」
ドラミは公園の池のボート貸し場でダイアナを連行しているところを見て、挙句の果てに水族館に行くと云う話を聞いていたのだ。ドラミはポケットからドーム上の器みたいなものを出した。
「このケース、スネタさんって云う子の部屋から見つけたんだけど、それを手掛りに探してみたら、こうなっていたのね。親に似て困った3人組だわ。その人はだれか知らないけど、ダイアナさんまで連行するなんてイタズラにもほどがあるわ。
さあ、ミニドラを返して頂戴。」
ドラミは手を出す。
「でも、ドラミちゃん、もう少し・・・。」
ダイアナは4人を睨んだ。
「いい加減になさってください。このミニドラは慣れない人が使うととんでもないことが起こるんです。手遅れにならないうちにミニドラをお返しください。ミニドラが嫌がってでも返すのです。」
「うん、判った。」
スネタはミニドラをドラミに返そうとした。ミニドラはきょとんとしている。そこへゼノンが何か言った。
「お別れの前にこの子に素敵な手品を見せてあげる。」
「ドララ～～～～！」
ミニドラは大喜びだ。
ゼノンの前にマントが出てきて、マントが降りている間だけに着替えを済ませた。

「ああ、貴方は！？」
「おや、いい手品だ。これは面白い。」
館長は拍手した。何事にも動じない人物だ。
着替えたゼノンは、のび労に向き直った。
「1！」
のび労の背に板が出る。
「2！」
鉄の手錠でのび労の四肢を拘束する。
「ゼノンさん、これは・・・。」
「此処からが本番よ。3！」
「わーーーー！」
のび労の体内から鏡が出てくる。
「ドララララ～～～～！」
「ミニドラ！」
「何、はしゃいでいるのですか！？状況をお考え下さい！」
「な、何これ！」
「みんな騙してごめんね。ぼくはゼノタイム。あるもの探すためにこの世界に来たんだ。」
「ドラ～。」
ミニドラは嬉しそうだ。ミニドラは、スネタから飛び出して鏡に触った。ミニドラは鏡に入ってしまった。
「こら、ミニドラ。待ってよ。」
ゼノタイムは鏡の枠を持って肩幅に合わせて伸ばした。伸縮自在な鏡なのだ。上半身を入れてミニドラを探した。その間にのび労は苦しみだした。ようやく、鏡からミニドラを捕まえて上半身を出した。
右手を持ち上げられたミニドラは楽しそうだ。のび労は失神してしまった。
「のび労、大丈夫！」
「ああ、気絶しただけだよ。

ダメだろう、ミニドラ。勝手に鏡の中に入っちゃ。下手をすれば、永久に出られなくなっていたところだったよ。」
「ドラドラ。」
「それで、何か探し物は見つかりましたか。なんかよく知らないけど、鏡に頭を入れて探すんですよね？」
「そうだけど、なかったよ。
のび労君ごめんね。」
ゼノタイムは指を鳴らすと鏡を体内に戻し、彼を解放した。
「なんだか、知らないけど。許さないわ。」
ドラミはポケットに手を入れる。
「あらら、恐い子。おいで、ぼくのレムレス。海の歌姫、マーメイコ。」
影から、人魚の姿をした13歳前後の少女を召喚した。
「マーメイコ。」
「ドララ。」
ミニドラは嬉しそうだ。
「マーメイコ。この子達をスナメリさんたちがショーをしている会場に連れていってあげてそこで芸でもしていらっしゃい。」
「はい。」
「ゆっくり、遊んでおくれ。」
「館長さん！」
全く呑気な館長だ。
レムレスは地面に潜る。水面だろうと地面だろうと潜れる怪物なのだった。
「何処に行ったの？」
「わかんないよ！」
「何時、どこから出てくるか判らないから。そうだ、うさぎ耳改！
これでどんな厚い壁があってもそれを通して聞くことができるわ。」
ドラミはポケットからうさ耳のカチューシャを出して頭にはめる。

地面の音が聞こえてきた。音はのび労の下に来ている。
「しまった。のび労さん！」
地面からマーメイコの手が出てのび労を連れ去った。
「のび労！」
「のび労さま！」
レムレスの魔の手はスネタにも来てしまった。スネタも捕まってしまった。
「わあ、スネタ！」
続いてジャイタはレムレスに捕まってしまった。
「マサシ様！」
「マサシさん！
どうしよう、こうなったら。空気ピストル！」
空気ピストルを構えて自分の足元の影を睨む。その時、外でドタバタと走り寄る音で地面の音が聞き取れなかった。
「もう、誰よ！静かにしてよ！」
ドラミの足元で両手が伸びる。気付いたダイアナは叫ぶ。
「ドラミ様！」
「えっ、キャー！」
ドラミも地面に引きずりこまれようとしている。
「ドラミ様！」
「おやおや、ヘンな雑音のせいで居場所はつかめなかったんだね。」
「煩い！
ダイアナさん、みんなに知らせて。ヘンな人が出てきたって。」
「はい、判りました！」
ダイアナは館長室を飛び出した。
「おやおや、頼もしそうな猫ちゃんだな。」
とうとう、ドラミは地面に引きずりこまれてしまった。
「それに引き換えこの子はなんかたわいもない仔犬ちゃんだ。さて、楽しいショーの始まりだよ。」

廊下
キッド達は、廊下を走っている。
「まったく、あいつらは！」
「早いところ、ミニドラを取り返さないとおかしなことになるぞ。」
そこへダイアナが駆けてきた。
「お父様ー！」
「ダイアナ！」
3体と1匹は立ち止まり、ダイアナも立ち止まった。
「どうしたのであるか！？」
「ドラミ様たちがアマゾンの青年のレムレスに捕まってしまいました。」
「なんだってー！」
「ほほう、また運命のラブストーリーですか？」
マタドーラの茶々にキッドの鉄拳がとんで彼を失神させた。
「それで、あいつらは！？」
「スナメリのショーを行っていた会場に向かいました。」
「ミニドラは？」
「青年に捕まっております。」
「そいつぁ、大変だ。」
目を覚ましたマタドーラは起き上がる。
「レムレスだかプロレスだかなんだか知らねえけど、ミニドラたちを取り返そうぜ。」
キッド達はミニドラ達を取り返しにいった。

ジャンピング潜水艦（後書き）

ダイアナちゃんは途中で捕まってしまいました。
おまけにゼノタイムが表れてしまいました。
これからどうなってしまうのでしょうか。

捕られたミニドラ（前書き）

ミニドラはドラミちゃんたちと一緒にゼノタイムに捕まってしまいました。
キッドたちはドラミちゃんたちを助けに行きます。
ちびうさちゃんたちは今、どうしているのでしょう。
アチモフじいさんはいまどうしているのでしょうか。

捕られたミニドラ

スナメリショーの会場

ドラミ達は少女レムレスのマーメイコの出した水の玉の中に閉じ込められてしまった。ミニドラは特殊な客席だと勘違いしてはしゃいでいる。

「ドラ〜！」

「ミニドラ、状況を考えなさい！私達は悪い人達に捕まっているのよ！この水の中じゃ秘密道具は使えないんだから。」

「第一、おまえの大好きなドラ焼きはあの人が持っているんだぞ！」

館長に貰った報酬のドラ焼きはゼノタイムが預かっているのだ。なにしろ探し物のためであるから、ミニドラを捕られたも同じだ。

「大丈夫だよ。僕はミニドラを悪用したりはしないから、ちょっとの間は人質になってもらいたいだけなんだ。」

「貴方ね！人質だろうと飼おうと何だって一緒でしょうが！ミニドラはなんとしてでも連れて帰りますからね！」

「あら、怖い。まあいいでしょう。カモが来るまで待っていましょうか。」

その時、ゼノタイムの背後から少女達が覗いている。

会場口

ドラえもん達はドアの影から覗いている。

「ああ、何てことだ。ドラミがあんな所に捕まっているなんて〜〜〜〜！」

「貴方はドラミさんのことになるとすぐにムキになるのですから。」

「妹想いと言え、ドイツもコイツも〜〜〜〜。」

王ドラとの言い争いをうさぎが仲裁に入った。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。阿野子たちを阿野男から助け出しましょう。」
〜よくいうわよ。半分はうさぎのせいなのに。〜「それにしても阿野人はゼオノイドに似てるわね。」
「言われてみれば確かに・・・・。」
「そんなことはいいから変身よ。」
「ハイ。」
ほたるはリップ・スティックを掲げて、うさぎとちびうさは変身ブローチを掲げる。
「「ムーン・クライシス！メイクアップ！」」
「サターン・プルネットパワー！メイクアップ！」
うさぎ達は変身を遂げた。

会場
「そこまでよ！」
ドアがバンと開きドラえもん・王ドラ・3人のセーラー戦士が現れた。
「ミニドラは今すぐに返してもらいます！」
「それは、アンタの玩具じゃないのよ！」
「ついでにドラミも返せ！」
「貴方が一体誰であろうと思い通りにはさせません。」
「愛と正義の！」
「セーラー服美少女戦士！」
「セーラームーン！」
「セーラーちびムーン！」
「とセーラーサターン！」
「そして私王ドラ！」
「とドラえもん！」
「月に変わって！」
『お仕置きよ！』

セノタイムは珍しそうに微笑んだ。
「ほう、こんなかわいらしいお嬢さん達がセーラー戦士だったんだ。」
「ドララ～！」
「だから、楽しそうにすんなって！」
「無邪気なんだから・・・。」
ドラミは水の玉をドンドンと叩いている。
「お兄ちゃん！セーラームーン！早く助けて！」
「ドラミちゃん、待ってて！今、助ける！」
セーラームーンは額のティアラに手を伸ばそうとした。しかし数本のナイフが飛んできた。
「うわっと！」
セーラームーンはジャンプして避ける。
「いきなり何するのよ！」
「それは、こっちの台詞だよ。せっかくのショーの観客を逃がさないでほしいな。」
「何が、観客よ！」
「ドラミを放せ！」
「しょうがないな。マーメイコ！」
「ハーイ。」
レムレスは水面から渦巻きをだして彼女達に襲い掛かった。
「サイレント・ウォール！」
サターンはサイレンス・グレイブを出して、結界を張るが、限界が来て割れてしまった。
『キャー！』
「セーラームーン！お兄ちゃん！」
「冷たいな～！も～！」
「阿野人魚は私が食い止めますから、セーラームーンとドラえもんはドラミさんたちを！」
「判った。」

「アタシとサターンはあのナイフ男を食い止めるから。」
「それじゃ、行きますか！」
「オー！」
王ドラは、マーメイコにカンフーを駆ける。
「ハアチャオー！」
マーメイコは水中に潜り込むが王ドラは追いかける。
〔ハイー！〕
〔なんの此れしき！〕
王ドラたちは水中戦を疲労する。
「ドラドラ～！」
ミニドラは手を叩いている。
ゼノタイムはナイフでセーラーサターンに切り掛かる。サターンは鎌で受け止める。
「あれ、やるじゃないか。」
「貴方に褒められても嬉しくないわ。」
サターンは一旦身を引く。その前にちびムーンがムーン・スティックでゼノタイムに振り上げる。ゼノタイムはナイフで受け止める。サターンも迎え撃つ。どんどんとゼノタイムを水の中に追い込もうとしている。とうとうゼノタイムは後がなくなってきた。段差が来ているのだった。
「これで終わりよ。」
「御覚悟。」
そのとき、空気弾がゼノタイムを水面に落とした。キッドの空気砲であった。
「キーちゃん！」
「ダイアナ！」
「スモール・レディ！いえ、セーラーちびムーン！お会いできて光栄です！」
ちびムーン達は再会を喜んだ！
「我輩たちも此処を探していたのである！」

「二人ともかっこよかったぜ！」
「いや、そんな。」
「照れます。」
照れてる二人にキッドが割り込む。
「照れてる場合かよ！ちびムーン、ドラミは！」
ちびムーンに詰め寄るキッドにアルテミスは突っ込む。
「それを言うなら『ドラミたちは！』だろ。」
「キッド様はドラミ様のこととなるとこれなんですから・・・。」
ドラえもんとセーラームーンはドラミたちを助けようとする。
「行くよ、ドラちゃん！」
「うん！」
セーラームーンは額のティアラを外す。
「ムーン・ティアラ・アクション！」
光のブーメランが水の球体を割る。
球体が割れてのび労たちが落ちてしまう。
ドラえもんはタケコプターで飛んでのび労達3人を受け止める。
「ドラえもん！」
「3人とも大丈夫！」
「うん！」
「キャー！」
ドラミとミニドラが水の中に落ちそうになってしまう。
「「ドラミ！」」
ちびムーンは咄嗟にクリスタル・カリヨンを出す！
「お願い、ペガサス！みんなの夢を守って！トゥインクル・エール！」
上空からペガサスが表れる。
「なんだ、アレは！」
「ペガサスだ！」
「何故、此処に！」
ペガサスはドラミとミニドラを背に乗せてちびムーンの元へ運ぶ。

ドラミとミニドラは降りる。
「御無事でしたね。」
「ドララ。」
「ありがとう。」
水面からマーメイコが飛び出した。続いて王ドラも這い上がる。
どうやら勝利したらしいのだ。
「よく、水の中で戦闘ができたでアルな・・・。」
「私はドコゾのカナヅチさんとは違いますからね。」
王ドラの一言でドラメッドは固くなる。
「ちょっと、きついアル！」
「今だ！セーラームーン！」
「判った！」
セーラームーンはムーン・スコープを出して、ペガサスは角の光をムーン・スコープに向ける。
スコープは力を増して光弾を放とうとしている。
「ムーン・ゴージャス・メディステーション！」
光弾はマーメイコに命中した。
「ステージ・アウト！」
マーメイコは影になった。
「ドラドラ～！」
ミニドラは拍手をしている。
「何、拍手してるのよ。アンタ・・・。」
「このミニドラはかなりの能天気です・・・。」
ゼノタイムは水面から出てきた。こそこそと逃げようとしている。
「それは、それとして！」
セーラームーンはムーン・スコープをゼノタイムに突きつけようとしている。
「何処に行くの！？」
気付かれたゼノタイムは固まってしまう。
「これ、返すから見逃してね。」

ゼノタイムは数個のどら焼きをドラえもん達に渡した。再び逃げようとしたゼノタイムの前にゼオライトと同じ竜巻が出てきた。
「それじゃ、失礼しまーす！」
竜巻に飛び込んだ。竜巻は消えてしまった。
「どらっどら～！」
ミニドラは手を振った。また遊んでねと言っているのだ。
「もう会わないって・・・。」
みんなは大笑いをしてしまう。

スネタの家の中庭
戦いの後でうさぎ達はミニドラとのび労たちを回収した。のび労達は会議から帰ってきたスネ樹とクリスタル・パレスから帰ってきたジャイチビ、そして彼女達と同じくミニドラを探していたノビスケとユカリにこってりと油を絞られてしまった。ミニドラはノビスケたちと感動の再会をした。
「全く、ミニドラと一緒に人様に迷惑かけるなんてもう少し上手に冒険できないのか？」
「ノビスケ、そこは怒るところじゃないよ。」
「マサシ。クリスタル・パレスでクイーン・セレニティと会話したけどおじいちゃん昔からあの人に苛められていたらしんだ。」
「そうなの？
それじゃ阿れは怒鳴り込みだったんだ。」
「こら、ジャイチビ。話を変えるな。」
「あ、ごめん。」
「そういえば、会議の時にセレニティと会ったんだけどなんか面白いことをいっていたな。自分やおじい様達の冒険の話や戦いとかいろいろと。」
そこへうさぎの肩の上でルナがセキをした。
「とにかく、ミニドラは君達の玩具じゃないから。素直に返しなさい。」

「「「はーい。」」」
「もう、ダイアナを引っ張り出したらダメだよ。そりゃ、未来の娘にも楽しい思い出を作らせてあげたいけど・・・。」
「お父様！」
ダイアナはアルテミスを睨む。
「ごめん。」
みんなは大笑いする。
「何はともあれ、一件落着だね。」
「がうがう。」
「でも、こんなにたくさんのどら焼きどうしよう。」
結局うさぎ達はこのままどら焼きまで回収してしまった。
「マサシ、ダメだろう。店のどら焼き持ち出しちゃ。持ち出した残りのどら焼きは店の倉庫に戻すけど、水族館の館長さんに貰ったどら焼きはこのお姐さん達に差し出すからね。」
「そりゃ、どうも・・・。」
「お土産に取っとこう。」
「美奈子ちゃん・・・。」
「これはドラちゃん達にあげましょう。」
「ドラドラ。」
衛はミニドラを見て何か思いついた。
「そういえば、このミニドラはどら焼きを一つあげるといろいろな道具を出すんだっけ。」
「ドド～。」
ミニドラは頷いた。うさぎはジト～と衛を睨む。
「ちょっと、まもちゃん。何が言いたいの？まさか、ミニドラをアチモフ探しに連れていこうっと言うんじゃないでしょうね～。」
「そのまさか、ミニドラの道具もあれば、あの男は捕まるんじゃないかな。」
ミニドラはこっそり王ドラの片袖から何かを取り出した。何かとはちびうさから取り上げたクリスタリオン・レーブだった。

「それも、そうね。よし決めた！そのどら焼きさえあればあのおっさんなんてあっさりと捕まるわ！
というわけでミニドラと一緒にあいつを捕まえましょう！」
「でも、そのミニドラの出す道具はなんでもミニサイズだから、あんまり役に立たないんじゃない？」
「あー、そういえばそうだ。」
最初に出した何処でもドアはミニサイズだった。
「ドードー。」
ミニドラはレーブで遊び始めたがちびうさに気付かれて自分ごとレーブをリュックに仕舞われた。
〜危ない危ない。危うくペガサスのことがばれるところだった。
とにかくあの二人はなんかペガサスを探しているみたいだ。〜
「それよりまずはあのゼオライトとゼノタイムとか言う人を探し出しましょう。あの人たち、あのアマゾントリオと何か関係がありそうだから。」
「言われてみれば、そうね。」
「まずはあの二人か・・・。」
ドラえもん達の使命は続くのだった。

捕られたミニドラ（後書き）

ミニドラを取り返したドラえもん達は、新たな決意を固めようとしています。
謎の青年ゼオライトとゼノタイムは例のデッド・ムーンの仲間でしょうか。
果たしてアチモフは何処にいるのでしょうか。
でもレーブが戻ってきて良かったです。

アマゾンツイン（前書き）

此処でゼノタイムとゼオノイドの正体をうまくありませんが説明をいたします。
デッド・ムーンのアマゾントリオと何か関係があるかもしれませんが、ペガサスはなんとしてでも守り通してみせます。
今回は、一日休んでしまいましたが、今から再会に入ります。

アマゾンツイン

２０世紀後期　十番街　不思議なサーカスのテント　舞台

舞台の上で様々な芸人たちがいろいろと疲労している。中でも赤白い髪の青年の炎のマジックや、水色の髪の少年の剣の舞、そして淡い橙色のロングウェーブの青年の猛獣ショーは中々のお手の物だ。ショーを疲労している内に、変わった衣装のおばあさんが合図を出す。

「静まれ！静まるのじゃ！」

３人以外の芸人が舞台を後にする。残された３人はおばあさんの前に立つ。

「タイガーズ・アイ此処に。」

「フィッシュ・アイ此処に。」

「ホークス・アイ此処に。」

「「「我ら、アマゾン・トリオ此処に集結。」」」

この３人はアマゾン・トリオといい、ペガサスを探している３人のオカマである。

「お前達。最近はあの例の小娘共と戦っておらんようだが、どこにおるのか知らんか？」

「ジルコニア様。彼女達なら２１世紀末期の時代に参られました。」

「あんな遠くに？」

「どうして判ったのじゃ。」

「私の部下のアマゾンツインにペガサスの捜索を依頼をしたのですが、何故かタイム・スリップしてしまいました。」

「あら、マジ？」

「うん、マジ？」

ジルコニアは多少呆れてしまった。

「ま・・・まあ、良いじゃろう。それで、例のペガサスはおった

のか。」
「それは、部下に聞いておきます。」
「頼むぞ、フィッシュ・アイ。」

バー
フィッシュ・アイは例の部下を呼び出した。
「ゼノタイム～。ゼオライト～。」
例の二人は影から姿を表した。
「ゼオライト此処に。」
「ゼノタイム此処に。」
「「我ら、アマゾンツイン。此処に見参。」
フィッシュ・アイは咳払いした。
「ポーズはいいわよ。
それよりペガサスは見つかった？」
「見つけたのですが、生憎誰が夢の宿主か未だに判らないのです。」
「ただ、判ったのはペガサスと何か深い関わりを持っている者と思われるあの桃髪の少女です。」
「桃髪の女の子？」
「それって、セーラーちびムーンじゃないのかしら。」
「そういえば、あの子。いつもペガサスを呼んでいたわね。」
「もしかしたら、苑子じゃないかな？」
「判らないわ。取り合えず他の子も調べてみましょう。」
タイガーズ・アイの意見に他のアマゾンは。
「それがいいでしょう。」
「賛成。」
それからフィッシュ・アイはアマゾンの双子に向き直り。
「その21世紀末期に案内して。」
「はい。」
ホークス・アイは不思議そうな顔を双子に見せた。

「所で他に何か変わったことはないかしら。」
「変わったことでしたら、２１世紀にへんてこりんな犬と狸に会いました。
後、他にセーラー戦士が出てきましたよ。セーラーサターンとかいう・・・。」
「あらあら、いつの間にか増えちゃったのね。」
「こうなったら3人で一斉攻撃を仕掛けましょう。」
「それがいいわ。」
こうして3人は２１世紀末期に行くことになったのだ。

２１世紀末期　夜　スネタの家　空き部屋1号
ミニドラの捜索を終えたうさぎ一行は明日のアチモフの捜索に向けてスネタの家で睡眠をとることになった。泊めてあげる代わりに自分達も連れてってという話で数が多い方が頼もしいということで同行することになった。
うさぎ達は、謎の青年の正体を掴もうとタイムテレビで調べて見た。なんと彼らはあのアマゾントリオの1人フィッシュ・アイの部下だった。
「やっぱり、あのオカマ達の仲間だったんだわ。」
「これで、正体は掴んだな。」
「あのパターンはアマゾン・トリオと同じだったんだな。」
「許せないわ。ペガサスだかなんだか知らないけど、今度表れたらコテンパンにやっつけてやるわ。」
「美奈子ちゃんはその二人と全然接触してなかったくせに・・・。」
「あ、そうでした。」
「今、思ったら私達も。」
この二人と接触したのはうさぎ・ちびうさ・ほたるの3名のセーラー戦士とドラえもん・王ドラ・キッド・ドラミ・マタドーラ・ドラメッドとルナ以外の猫ちゃん達だった。

「そういえば、俺も直接あいつらと戦っていないんだった・・・・。」
レイたちはあの二人とたたかっていないのだった。
「そうよね。それより、例のアチモフのじいさんの居所がまだわからないの。」
「今、それを調べてるんだよ。レイちゃんはいちいち煩いな。」
「何ですって～～～！狸の分際で～～～～！」
「僕はネコ型ロボットだ～～～～～！」
またもやレイとドラえもんの喧嘩が始まった。
そんな一行に対し三日月猫一家はスヤスヤと寝ている。

空き部屋2号
ちびうさはレーブを通してペガサスと会話した。もちろんほたるも一緒だ。
「今日はありがとう。新しい力を与えてくれて。」
「どういたしまして。でも、結局王ドラさんとほたるちゃんにばれちゃったね。」
「うん、全くミニドラったら。幸いはただの玩具と思っているけどばれたら一溜りもないじゃないの。」
ミニドラはスヤスヤと寝ている。
「いいじゃないの。ばれていないんだから。」
「そうだよ。
それよりなんか大変なことになったね。あの例の二人が出てきて。おまけにアチモフの捕獲の任務まで出てきたし。」
「あのおっさんには、困ったものだわ。人の銀水晶は狙おうとするし、ほたるちゃんを利用しようとするし、ドラちゃん達に突っかかってくるし。いい迷惑よ。」
「だったら、その人が来たら僕が守ってあげるよ。」
「本当？」
ちびムーンは目を輝かせている。

「じゃあ、お願いね。」
「任せて。」
その3人の会話をミニドラがこっそり見て聞いていた。それも嬉しそうな笑顔で。

空き部屋3号
ドラえもんはレイとの喧嘩を済ませた。結局アチモフの居所が判らなかった。
「全く、レイちゃんは〜。僕のことを狸呼ばわりして〜！」
ドラえもんは体のあちこちに痣やコブをたくさん作っていた。
「大丈夫、お兄ちゃん。」
「大丈夫じゃないよ。レイちゃんは口があんまりにも悪すぎる。」
グチグチ文句を言うドラえもんにマタドーラとドラリーニョが取り成す。
「そんなこというなよ。レイをどこぞの腹黒と一緒にするなよ。」
「そうだよ。確かにレイちゃんは王ドラなんかより口は悪いけど、そう怒らないで。」
その言葉に王ドラはプッツンしてしまい、ヌンチャクでマタドーラとドラリーニョの頭を叩いた。二人は目を回している。
「レイさんと私を比較しないで下さい。ホントにも〜〜〜〜！」
「御主等、大丈夫であるか？」
「だいど〜ぶ〜。」
「ほれふらい、なんほほないほ〜。」
「がうがう。」
ドラニコフは二人を介抱した。
「それより、王ドラ。さっきお前の話していた。例のペガサスのことなんだが。そいつらはペガサスってのを探してるんだよな。」
「はいそうです。その少ない秘密をスモール・レディが握っているのです。」
「ちびうさちゃんが？」

「どうして？」
「判りません。ただ、スモール・レディはペガサスと心を通わせていることだけが確かです。」
「全く、あのミニチュアレディが。うさぎたちはともかくなにも俺達にまでこそこそと隠さなくてもいいのによ。」
マタドーラは愚痴を溢した。
「彼女はうさぎさん達にとはいいましたが、ドラえもんたちにもまでは言ってませんでしたからいいでしょう。」
「確かに王ドラの言うとおりだ。」
「このことは絶対にうさぎさんたちには言わないでくださいよ。」
『了解しました。』

屋根の上
アマゾン・ツインとアマゾン・トリオは21世紀後期に辿り着いたのだ。
「ここが、21世紀後期ね。」
「はいそうです。」
「なんか神秘的な町ね。」
「そりゃ、未来の世界だもの。それより、早くレイのペガサスを探さなくちゃ。あれ、庭に誰かいるわよ。」
「あれ、本当だ。この人が、例のペガサスの宿り主かな？」
フィッシュ・アイは屋根から飛び降りた。

庭
庭にいるのは白いひげを生やしたおっさんだった。
「ふー、此処まで逃げれば大丈夫っしょ。」
このおっさんはアチモフだった。一時はセーラー戦士とドラえもんズの活躍で捕獲されたが、後に脱獄をしたのだ。全く懲りないおっさんだ。
そのおっさんに水色の髪の少女が姿を表す。

「ちょっと、そこの怪しいおじさん。」
「はい？わたくし？」
「他の誰のことをいうのよ？」
「そういうお嬢さんだって、この家に転がり込んで十分に怪しいっしょ。」
「そう、僕はドロボウさん。おじさんと同じく。」
少女は体をくねらせるのだった。
「おじさんはどんな夢を持っているの？」
「そんなの聞いてどうするっしょ？」
「いいから、教えて。」
「そこまでおっしゃるなら、教えてあげるっしょ～。世界征服っしょ。」
「世界征服？面白い夢だね。」
少女は、懐からナイフを取り出してアチモフの髭を殆ど切り落とした。
「何するっしょ！？」
「世界征服していいのは、あのお方だけよ。」
少女は衣装替えをしてフィッシュ・アイになった。なんとその正体はフィッシュ・アイだった。
「ぎえ～！男の子～～～～～！」
これは大変なことになってしまったのだ。

空き部屋3号
「なんだ、なんだ。」
ドラミとドラえもんズは寝ていたが、あの騒ぎで起きてしまった。
「誰かが、騒いでいるのでしょう。多分。」
「ちょっくら怒鳴り込みに行くぞよ。」
ドラミとドラえもんズは部屋を抜け出した。

庭

「ぎゃ～～～～～～～～！はひ～～～～～～～～！」
アチモフはフィッシュ・アイが召喚した板に貼り付けにされて夢の鏡を覗かれている。しかし。
「どう、フィッシュ・アイ？」
「ペガサスはいた？」
タイガーズ・アイたちも降りてきた。フィッシュ・アイは首を横に振った。
「ダメよ。この人の夢の中にもいないわ。」
アチモフは拘束されたまま目を回している。
「このおっさんも外れか？」
「しょうがない。此処で始末しますか？」
「そうしましょう。」
その時、何か物音がした。
「誰？そこにいるの？」
ホークス・アイは松明を取り出して火を放った。火は八枚の布のような物にかかった。
『アチチチ！』
布の下からちっこい人形８体が飛び出した。８体共黒こげだ。
「ひ～、暑かった。」
「あれ？」
「君達は？」
「「さっきの子ダヌキちゃんたちと仔犬ちゃん。」」
『狸じゃない！』
「私は犬じゃないわ！
というか貴方達は昼間の人達じゃないの！？」
「あらま、この子達がアンタ等の言っていた犬と狸ちゃん達なの？」
『違うってば～～～～～！』
ドラえもん達は怒る。
「中々弱そうだけど、鬱憤ばらしにいいじゃない。

よし、相手になってあげる。」
フィッシュ・アイはナイフを、タイガーズ・アイはムチを、そしてホークス・アイは松明を取り出した。
ゼオライトとゼノタイムは。
「こうなったら。」
「ちょっとでも。」
「「遊んじゃおう。
おいで、僕達のレムレスたち月光に輝く聖獣。」」
「ヒカリコと。」
「アカリコ。」
影から双子の猫のような少女と狐のような少女を召喚した。
「ヒカリコ！」
「アカリコ！」
「ひえ～、強そうな獣人が出てきたっしょ～～～！」
アチモフは息を吹き返した。
声に反応したマタドーラは、声を出した。
「あ～～～、Ｄｒ．アチモフだ～～～～！」
「此処にいたのか！？」
「ゲゲ！ドラえもんズ！？何で此処に！？」
「へっ！探す手間が省けたぜ！」
これまでの事件の現行犯のＤｒ．アチモフが今、やっと此処で見つかったのだ。
「あれ、この人お知り合いだったんだ。」
「知らなかったよ。」
双子はナイフを構える。
「ドラミ、みんな。アチモフは僕が回収するから、君達はレムレスとアマゾンの方をお願い。」
「判ったわ。」
「それじゃ、行くぞーーーーー！」
『オーーーーーーーー！』

ドラえもん以外のネコ型ロボット達はアマゾンたちに立ち向かっていく。
「おやおや、やる気満々だね。」
「それじゃ、こっちも本気だそうか。」
「それじゃ、レッツ・ゴー！」
『オーーーーーーーー！』
アマゾントリオとツインとレムレスはドラえもん以外のネコ型ロボットと抗戦する。
その間にドラえもんはアチモフを回収しようとする。ドラえもんは猛スピードで後に回り込み板に頭突きを食らわす。板は、ばらばらになって砕けた。その衝撃でアチモフは失神した。ドラえもんは素早くアチモフを担ぎ上げた。
「アチモフ、確保！」
キッドとドラミはレムレスと戦っている。妹のヒカリコは猫のような身のこなしで爪でドラミを切り掛かり、姉のアカリコは狐のような動きで爪でキッドを切り裂こうとしている。キッドとドラミが背中合わせになったところでドラえもんが怒鳴った。
「なんで、二人なんかでレムレスと戦ってるんだ～～～～～！」
「偶々よ～～～～！」
「つうか、一々なんことで反応なんかすんじゃね～よ～～～～～！」
キッドたちが睨み返した隙を突いて。
「チャンス！」
レムレスたちは、二人を捕まえてしまった。
「キッド、ドラミ！」
一方王ドラはタイガーズ・アイのムチをかわしながら突進して、彼の顎に蹴りを入れた。鞭はタイガーズ・アイの手から離れて中に舞った。
「ホアッチョー！」
「グワッ！」

タイガーズ・アイは顎を押えながら地面に尻餅を着いた。
「勝負ありです。」
ところが、鞭が舞い降りて柄が王ドラの頭に直撃した。王ドラは目を回した。
「あらま、随分と間抜けね。」
マタドーラはフィッシュ・アイと真剣勝負をした。
「コイツ！」
「テヤ！」
二人の腕前は互角だった。フィッシュ・アイはナイフ投げは大の苦手だけど、振り上げるのは得意だ。
それでも、剣の腕前はマタドーラの方が上だ。遂に追い詰められてしまった。
「どうだ。参ったか！」
「くっ！」
フィッシュ・アイは等々、頭に来てナイフを投げる。それをマタドーラのヒラリマントで。
「ヒラリ。」
とかわすが、ナイフは蜂の巣をマタドーラの頭の上に落としてしまいマタドーラは蜂の餌食になった。直後に目を回す。
「あれれ、てんで弱いわね。」
フィッシュ・アイは目をぱちぱちさせる。
ホークス・アイは、ドラニコフと対峙している。ドラニコフは、取り寄せバックを出して、なにやら地球儀に良く似たものを取り出す。なんとそれは、ちびうさのスタリオン・レーブだった。ドラニコフは、レーブの丸い部分を見ると。
「アオーーーーン！」
「あらま、狼に変身しちゃった。」
ドラニコフは、獅子唐を食べて、炎を吐いた。ホークス・アイも負けずに松明を取り出し、火の渦を疲労した。炎と火の渦がぶつかり合い、遂に炎が押されてしまい火の渦を受けて黒こげ姿で気絶し

た。
「あちゃー、やりすぎたのかしら。」
ホークス・アイは左の拳で自身の頭を小突いた。おまけにペロを出した。
ドラメッドとドラリーニョは、アマゾン・ツインに大苦戦だ。ありったけのナイフを投げられては、避けるのに精一杯で、攻撃する暇は、殆どないのだ。
「なんだか、僕達が水に追いかけられている時と同じパターンだね！」
ドラメッドを背負いながら、ドラリーニョは二人の攻撃から逃げ回っていた
「これのどこか、水に追われている時と同じパターンでアルか～～～～～！」
これでは、攻撃ができないのである。
「ドラリーニョ、何とかするのであ～～～る！」
「うん、僕なんとかする～～～～～。」
ドラリーニョは猛スピードで木に登り、空中回転した。
「トッテンパンノニャンパラリー！」
ドラメッドは懐から金色の玉を取り出した。
「魔法玉を食らうでアール！」
ドラリーニョの方へ放り投げた。
「シュート！」
それを、ドラリーニョは蹴る！
玉は双子の方に当った。煙が立ちこもる！
「やったであるか？」
煙から数本のナイフが出てきて二人はバランスを崩して下に落ちて地面に顔面をぶつけた。
「おやおや。」
「たわいもない。」
「みんな！」

「おっと。」
「動かないで。」
ドラミたちは、とうとうアマゾンに捕えられてしまった。全員はタイガーズ・アイの鞭で拘束されている。
「彼等を助けたくば、ペガサスの宿り主が誰か、教えて頂戴。」
〜宿り主か。宿り主を目印にしてペガサスを探しているのか。もし、ちびうさちゃんが宿り主だってばれたらペガサスは、捕まってしまう。
かくなるうえは、時間稼ぎだ。〜「お前達は、どうしてペガサスを探しているんだ。一体、なんの目的でこんなことをしているんだ。」
「そんなこと、聞いてどうするのよ。」
「大体、僕達がアンタ等の遊びに付き合うとでも思うの？」
「遊びじゃない！質問に答えろ！」
フィッシュ・アイはじれったくなり。
「これじゃ、埒が厭かないわ。」
「しょうがない。」
「二人ともこの狸をやっちゃっていいわよ。」
「「はーい！」」
双子のレムレスはドラえもんに襲いかかろうとしている。
ドラえもんは、今最大の危機に陥っている。

アマゾンツイン（後書き）

アチモフじいさんはやっと見つかりました。
でも、ドラミちゃん達は、アマゾンの手に落ちてしまい大ピンチです。
セーラー戦士が来てくれれば何とか助かると思うのですが。
それは、次回にとっておきます。

捕えられたのび労たち（前書き）

２０１１・０２・０４，１２：０４；前作の世界沈黙計画を企んでいたＤｒ．アチモフが、２１世紀後半に表れてドラえもんズとドラミちゃんは捕獲に成功したもののドラミちゃん達はアマゾン・トリオとアマゾン・ツインとそのレムレスに捕獲されてしまいました。

２０１１・０２・０４，１０：４０；お待たせしました。再開いたします。

セーラー戦士は、間に合うのでしょうか。

果たして、ドラえもんの運命はどうなるのでしょうか。

２０１１・０２・０４，１７：１１；これからセーラー戦士たちが救出に向かいます。

捕えられたのび労たち

スネタの部屋
のび労とジャイ吉はスネタの部屋に泊まることになったのだ。寝ている彼等は、庭の方が騒がしくなったので目を覚ましてカーテンを開けて窓を開けずに庭を覗いたのだ。なんと庭でドラえもんズとドラミが戦っているのではないか。
「ドラえもんズとドラミちゃんだ！」
「あの人たちと戦っている。」
「大変だ、うさぎお姉ちゃんたちに知らせなくちゃ。」
のび労達は、空き部屋1号に向かった。

空き部屋1号
のび労はドアをノックした。
「どうしたの？こんな時間に。」
うさぎは目を覚ましてドアを開けようとした。
例は、痣と傷だらけでのびていた。多分ドラえもんと喧嘩した後らしいのだ。
うさぎはドアを開けると3人は飛び込んできた。
「大変です。怪しい奴等が来てるんです！」
亜美たちも目を覚ました。
「なんだって！」
「それで、その怪しい奴等は何処にいるんだ。」
「中庭です！」
「だったら、ちびうさちゃんやほたるちゃんを起こさなくちゃ！」
「でも、レイちゃんは如何するの！？」
確かにレイは未だ、のびている。
「行くわよ・・・・。いたたた・・・・・。」
レイは目を覚ましてボロボロになった体を起こそうとしている。

［むりしなくてもいいのに・・・。］
「煩いわね。」
うさぎと衛はちびうさとほたるを起こしに空き部屋2号に行った。

空き部屋2号
ー ー ドンドン ー ー というノックでちびうさとほたるは目を覚ました。
「ちびうさ！」
「ほたるちゃん！」
ずっと起きてたミニドラは小さな体でドアのノブにしがみついてまわした。
ドアが開くとミニドラはブランブランと揺れている。
「うさぎ、どうしたの？」
「庭に怪しい奴らがいるんだよ！」
「なんですって！」
「詳しい話は後、とにかくみんなを助けましょう！」
「判りました！」
「まもちゃんは、一応念のためにルナたちを起こして！」
「判った！」
さっきまでにドアノブに揺れていたミニドラはノブから放してスタスタと窓のそばに行って。
「ミニドラ、アンタ何やってんの！？」
ミニドラは窓を開けて、窓から木に飛び移り、木から下りた。
「何やってるんのよ~ ~ ！」
「しょうがない。うさこ、ちびうさ、ほたるちゃん。先に行って、みんなと合流するんだ。」
3人は頷き、一行は1階に向かった。

玄関
レイたちは、待っていた。

「お待たせ。」
「遅いじゃないの！」
「ごめんなさい、私がモタモタしていたせいで。」
「別にうさぎが、ミニドラに気を取られたからじゃないのよ。」
「そう、うさぎさんは全然悪くないの。」
言い訳したほたるとちびうさにうさぎは突っ込みを入れた。
「あの~~~。全然フォローになってまへんで。」
漫才を始める3人。そこへ、タキシード仮面に起こしてもらったルナがハリセンを持って、3人の頭を叩いた。
「コラーーーー！漫才なんかやってる場合じゃないでしょうかーーーー！」
ルナやのび労たちも下に来ていた。
「ルナ、何もそこまで・・・。」
「いいえ、お父様！お母様の言うとおりです！」
「いや、そういう問題じゃ・・・。
とにかく、みんな変身だ。」
「はい！」
「「ムーン・クライシス！」」
「マーズ・クリスタルパワー！」
「マーキュリー・クリスタルパワー！」
「ジュピター・クリスタルパワー！」
「ヴィーナス・クリスタルパワー！」
「サターン・プラネットパワー！」
『メイクアップ！』
うさぎはスーパーセーラームーンに、ちびうさはスーパーセーラーちびムーンに、レイはスーパーセーラーマーズに、亜美はスーパーセーラーマーキュリーに、まことはスーパーセーラージュピターに、美奈子はスーパーセーラーヴィーナスに、そしてほたるはセーラーサターンに変身した。

庭

ドラえもんは、アマゾンツインが召喚したレムレスに苦戦している。当たり前だ。仲間が人質に取られてしまったからだ。

「くっ！」

ドラえもんは双子のレムレスに突き飛ばされてしまった。

「ドラえもん！」

「お兄ちゃん！」

「卑怯だぞよ！」

レムレスはドラえもんにじみ寄る。

「「もう終わりよ。」」

その時、”ドララ”という声がした。ミニドラが降りてきたのだ。

「誰、この子？」

「キミはあの時の子。」

「ド～ララ～！」

「コラ、ミニドラ何しにきたんだ！」

「危ないから、あっちに行っていなさい！」

それでもミニドラは、ゼノタイムに懐いてきた。

「ミニドラっていうんだ。」

「ドラ~ ドド~ 。」

そこへ、フィッシュ・アイが抱え上げる。

「遊んでる場合じゃないでしょう。もう。」

「どうするのよ。こいつ。」

「いっそのこと、これも人質にとっておきましょう。」

「それが、いいわ。」

結局ミニドラも人質になってしまった。

「そんな～～～！」

「ガウ~ ~ ~ ！」

そこへ、セーラー戦士が駆けつけた。

「ミニドラとドラミちゃん達を放しなさい！」

「げげ、あんたたちは！」

「セーラームーン、のび労君！」
「お待たせドラえもん。」
のび労達はドラえもんに駆け寄った。
「こんな夜遅くに人の家の庭に忍び込むなんて、イタズラにもほどがあるわ！」
「そのうえ、大切な仲間に手をあげるなんて、絶対に許してあげない！」
『愛と正義のセーラー服美少女戦士セーラー戦と！』
「この私、タキシード仮面が！」
「月に代わって！」
『お仕置きよ！』
さすがのアマゾン達は悔しくなった。
「キー、お邪魔虫が来たー！」
「お二人とも、やっちゃてー！」
「「了解！」」
双子はセーラー戦士とタキシード仮面を襲う。そこをタキシード仮面のスティックが二人を弾き飛ばす。
「次はドラちゃん達ね。」
「キー、なんて奴！」
「僕に任せて！」
ホークス・アイは松明の火の渦を放つ！
「サイレント・ウォール！」
サターンは紫の球体で炎を防いだ。火の渦は無効化されてしまった。
「今のうちに。お願いペガサス！みんなの夢を守って！トゥインクル・エール！」
ペガサスが舞い降りてきた。
「ウワー、綺麗！これが、例のペガサス！」
「がうがう！（カッコイイ！）」
ペガサスはドラミたちを救いだした。ミニドラはフィッシュ・ア

イの手からするりと抜け出してペガサスにしがみついた。
「ちょっと。」
「ドララー。」
ミニドラは手を振った。ペガサスはドラミたちをドラえもんの元に送り届けた。ミニドラはペガサスから降りた。
「お兄ちゃん！」
「ドラミ！」
ドラミとドラえもんは抱き合った。
「ペガサス、ありがとう。」
ドラえもんは礼をいうとペガサスは微笑んだ。そこへアマゾン・ツインがやってきた。
「見つけたぞ。」
「我等と一緒に来い。」
双子はペガサスを捕まえようとするがペガサスは身をかわして、金色の角を二人に向ける。ムーン・スティックとカリヨンは再びムーン・アローになった。
二人は、ムーン・スコープとムーン・アローを構える。
「ムーン・ゴージャス・メディステーション！」
「ムーン・プリンセス・ドリームライト！」
光と矢は二人を攻撃する！
「「ステージ・アウト！」」
双子は影に戻った。
「やったー！」
ドラえもんズ達は大喜びだ。そこへ教授が来た。
「おーい、みんな大丈夫か！」
「あ、パパだ！
大丈夫よ。パパー！」
サターンは手を振った。その時、数人の男達がサターンを捕獲した。
「ムグ！」

「セーラーサターン！」
他の男達はのび労たちを捕まえた。男達は怪しい笑みを浮かべて腕組をしている白髪のおっさんのところに行った。なんと、いつの間にかアチモフが息を吹き返していた。
「きしし、そこまでっしょ～。」
「あんた、どうやって脱獄したのよ！」
「そんなの、細い針金みたいなものがあれば、簡単っしょ～～～。」
「もー、許せない！」
「許せないのは、こっちしょ！この前の仕返しとしてこの子供達は人質として預かっておくっしょー！」
一方、タイガーズ・アイたちは大混乱だ。
「なんか、やばいことになりそうですわ・・・。」
「こうなったら、２０世紀末期に帰りましょう。」
「それがいいわ。」
タイガーズ・アイは火の渦を、ホークス・アイは葉の渦を、フィッシュ・アイは水の渦を召喚して渦に入って、退散した。
「ドララ～。」
ミニドラは手を振っている。また、遊ぼうねと言っているのだ。
「冗談じゃないわ。返してよ！」
ちびムーンは矢を放とうとしたところ、アチモフは爆弾を取り出して地面に叩きつけた。爆発の煙の中で何かがちびムーンの額に直撃した。ちびムーンは手に取ると。
「げ、レーブじゃないの。なんで此処に。」
レーブは光のなって消えた。その後、煙が消えた。
「あれ、アチモフがいない。」
「サターンやのび労くんたちもいないわ。」
「くそ、逃げたんだ。」

屋根の上

一方、アマゾン・ツインは逃げなかった。それどころか屋根の上に移動していたのだった。
「ゼオライト兄さん。どうしよう。のび労君たちが捕まっちゃったよ。」
「ゼノタイム。あのアチモフとかいうおじさんはかなりの曲者だぞ。なんとしてでもほたるちゃん達を助け出さないと大変なことになってしまうよ。」
「どうやって、あの子達をあのおじさんから取り返すことができるの。」
「決まってる。あの手を使うんだ。」
ゼオライトは、ミニドラを見た。ゼノタイムはミニドラの力を借りることだと悟った。

庭
土萌教授は、肩を落とした。
「ほたる。ほたる・・・。」
「どうしよう。ほたるさんが捕まってしまったわ。」
「だったら、僕に任せてください。」
ペガサスの言葉に顔をあげる一行。

空き部屋2号室
ちびうさのレーブはちびうさのリュックの近くに戻っていた。

捕えられたのび労たち（後書き）

２０１１・０２・０４，０１：３６；今日は、この辺にしておきます。では、又明日。
２０１１・０２・０４，１２：３６；此処でお休みしておきます。
２０１１・０２・０４，２３：１７；やっと、終わりました。いよいよ、この小説も最後になってきました。
今回は、日日と時間を表現しました。
果たして、彼女達は無事にのび労君たちを救い出すことができるのでしょうか。暫くは他の小説のこともありますからちょっと、間はお休みしておきます。

決戦Ｄｒ．アチモフ対セーラー戦士（前書き）

２０１１，０２，１２，１１：０２，いよいよ、最終章に入りました。大変長らくお待たせいたしました。セーラー戦士とドラえもんの最後の戦いが始まりました。ほたるちゃんは2度目の捕虜になってしまい大変です。おまけにペガサスのことはドラえもんズとドラミちゃんにばれてしまいました。
それでも彼女達は、前向きに歩いています。
今回はとても長いのですが、これで終わりにしておきます。
次作はフィナーレの短編にしておきたいと思っています。

決戦Ｄｒ．アチモフ対セーラー戦士

２０６１年　深夜　骨川邸　空き部屋１号

ドラえもんはタイムテレビで必死になってＤｒ．アチモフの居所を探そうとしている。ちなみに三日月猫一家とミニドラは寝ている。ほたるはのび労達と一緒にアチモフに捕まった後は、ミニドラはルナたちと空き部屋２号で、ちびうさは空き部屋１号で寝ることになってしまった。ドラえもんズとドラミはうさぎ達の付き添いのために一時的に此処にいることになった。

「ねえ、ドラちゃん。まだ、ほたるちゃん達の居所が判らないの？」

「ちょっと、待って。今、調べているところなんだ。」

そんなドラえもんにレイはケチを付ける。

「全く、いざって時に役に立たないんだから。」

ちびうさは厳しい顔でレイに注意する。

「レイちゃん、ドラちゃんだって一生懸命やってるんだから、あんまりキツイことを言わないでよ！」

「何も、怒鳴ることはないでしょう。」

「レイさん、ちびうささん、こんな時に言い争っている暇はないでしょう。」

「そうですよ。今はこれからのことを考えているんですから。」

「ちびうさちゃん、ほたるちゃんを奪われて悔しい気持ちはみんな同じだよ。」

「レイちゃんもドラえもんは、一生懸命やっているんだからあまり、責めないでやってくれ。」

口論しようとするレイとちびうさにドラミ・王ドラ・まこと・衛は仲裁に入った。

「土萌教授だって、娘さんであるほたるちゃんを取られてすごいショックなんだから。」

「これで2回目だけどね。」
「美奈子殿・・・。」
その時、タイムテレビに反応があった。
「如何したドラえもん。」
「ほたるやのび労達が見つかったのか？」
うさぎ達はタイムテレビを覗きこむ。その反応にルナたちも目を覚ました。
「ほたるちゃんは今、何処にいるの？」
「なになに・・・・。」
「ほたるは今何処にいるんだ？」
「見せてください。」
「ドラドラ。」
ルナ・アルテミス・ダイアナ・ミニドラはうさぎ達の頭を押しのけていった。
「がうがう。」
画面には21世紀末期のクリスタル・パレスが映っていた。
「これは、クリスタル・パレス？しかもこの時代の？」
「なんで。」
「し！黙って聞いてて！」
「はい。」
クリスタル・パレスの展望台にアチモフがいてほたるとのび労達は檻の中に閉じ込められていた。
「酷い奴、この時代のクリスタル・パレスを乗っ取って世界征服を始める気なんだわ。」
「許せない！何が、なんでも阿野爺の野望はアタシたちが阻止して見せる！」
「でしたら僕が、皆さんをクリスタル・パレスに御送りいたします。」
彼等の後にペガサスがいた、ペガサスはほたるやのび労達の救出の為に今夜はこの部屋に泊めてもらうことになったのだ。

「知っての通り、僕には不思議な力がありますから、皆さんをテレポートさせて上げます。」
「どうする、うさぎ？」
考え込むうさぎの代わりにちびうさが答えを出した。
「それが、いいわ。セーラー・テレポートじゃいちいち行ったり来たりが面倒だもの。ペガサスと協力した方が手っ取り早いわ。」
「そうね。よし、明日の朝出発だー！」
『オー！』
うさぎ達は、各自就寝することにしたのだった。

空き部屋3号　就寝時
ルナたちが寝ているところに、二人の青年が密かに訪れてきた。
ミニドラはその青年達に気付いたのか飛び起きて。
「ドラ~~~！」
「シーーーーー！」
青年達はミニドラの口を押えた。
「シイシイ・・・。」
「そうそう・・・。」
ミニドラは二人の青年に連れられて骨川邸を後にした。

翌日
「皆さん、大変です~~~~~！」
三日月猫一家はうさぎ達のいる空き部屋1号に向かった。

空き部屋1号
「如何したの？みんな？」
うさぎ達はたったいま着替えを済ませたところだった。
「ミニドラが消えてしまいました！」
『何ですってーーーーー！』
「どういうことなの！？」

「判らないよ!目がさまたら急にミニドラの姿がなくなっていたんだよ!」
「こんな朝早くから!?」
そこへドラえもんとドラミが入ってきた。
「ああ、また振り出しに戻っちゃったか?」
「本当にしょうがないことをしたわね。うさぎさん。」
「そう・・・じゃなくて、22世紀のセレニティ!」
うさぎは珍しくのり突込みをした。

庭
うさぎ達はセーラー戦士になり、衛もタキシード仮面に変身して、ペガサスやドラえもんズと共に庭に集合した。土萌教授は前回のように見送りに来た。
「土萌教授、お嬢さんは必ず私達が救出いたします。前回もこのようなことが会ったのですが、今回は簡単ですから。」
「そういうことならいいんだ。娘を宜しく頼むよ。」
「はい。」
「「タキシード仮面様~~~~~~。」」
セーラームーンとセーラーちびムーンはタキシード仮面をジト~~~~っと睨みつけた。
「あはははは・・・。さあ、ほたるちゃんを救出しにいこうか・・・・。」
{{もう調子がいいんだから。}}
「それじゃあ、いきますか。」
「はい。」
ペガサスは角を翳した。
ムーン一行は光に包まれて消えていった。
土萌教授はそれを見送った。
「ほたる。」

クリスタル・トーキョーの展望台
Ｄｒ．アチモフはクリスタル・パレスに潜入して次々とパレスの住民を捕まえてしまう。もちろんネオ・クイーン・セレニティとキング・エンディミオンも一緒だ。
ほたる・のび労・ジャイ吉・スネタは檻の中に閉じ込められている。
「Ｄｒ．アチモフ！これはどういうわけか知らないけど、僕達を此処から出せ！」
「出してよ~~~！」
「こんなことをして良いわけないだろう！？」
アチモフは耳を塞いでいる。
「煩い、お子ちゃまっしょ！お前さんたちは大事な人質だから、静にしているっしょ！」
ほたるはアチモフを睨みつけた。
「アチモフ！貴方の逆恨みにはつくづく呆れてしまうわ！貴方が悪いことをしなければ３０世紀のクリスタル・パレスの警備兵に捕まったりはしなかったのよ！」
「失礼なことを言うお嬢さんだっしょ。人の復習にケチを付けるんじゃありません。
かくなる上は、この時代のクリスタル・トーキョーを支配するべし。そうすれば世界征服は夢じゃないっしょ~~~~！
が～はっはははははは！」
レイの言うとおりこのクリスタル・パレスを支配して世界征服を叶えようとしているのだった。アチモフの笑い声はパレス中に響き渡った。

庭
庭に例の双子はいたのだ。兄のゼオライトと弟のゼノタイムだ。ミニドラを連れて行った2人の青年の正体は彼等だった。ミニドラはゼオライトの左肩に乗っており、ゼノタイムの腕には袋一杯のど

ら焼きが抱えられている。
「どうやら、阿野子達はあの結晶製の城の中に捕まってるよ。ゼノタイム。」
「ねえ、兄さんこのまま直接、展望台に突っ込むていうのは如何かな？しかもソーラーヨットを使って。幸い、昼間だから光いっぱい浴びれて思う存分飛び回れるよ！」
ゼノタイムは袋からどら焼きを2つも出してミニドラに食べさせた。ミニドラはミニサイズのソーラーヨットと懐中電灯に良く似た電灯を取り出した。
「ミニドラ、ソーラーヨットは判るけど、その懐中電灯は何？」
「スースー。」
ミニドラはそのライトを自分達に向けて放つとミニサイズのソーラーヨットに乗れるほどのサイズになった。
「そうか、これはスモールライトって云う道具だったんだ。ありがとう、ミニドラ。
2つもどら焼きをあげて大正解だった。」
アマゾン・ツインとミニドラはソーラーヨットに乗ると船を発進させて展望台に向かった。
展望台の近くに来たとき。
「展望台が見えてきた。」
「後もう少しだ。」
上空に強い光が発してヨット全身に光が降り注いだ。
「わあ、なんだ、なんだ~~~~~！？」
パワーのエネルギーがオーバーしてしまい操縦不能に陥ってしまった。
「ワーーーーー！コ、コントロールが効かない~~~~~！」
ヨットはあっちやこっちや飛び回ってしまった。
セーラー戦士とドラえもんズは庭に入ることが出来た。
「着きましたよ。」

「ありがとう。ペガサス。貴方に来てもらって本当によかった。」
「ところで、近くに誰かいなかったかしら？」
「さあ？」

展望台の近く
操縦不能に陥ったソーラーヨットは本当に展望台のアチモフに突っ込んで行ってしまう。
「ん？何事っしょ？」
小さな物体はガラスを割ってアチモフの眉間に体当たりを食らわせた。
アチモフは目を回してのびていた。ヨットの中の双子も目を回している。ただ、ミニドラは元気だった。

庭
パレスの展望台からの音は庭にいるセーラー戦士とドラえもんズにも聞こえた。
「何あれ？Ｄｒ．アチモフ？」
「そうらしいよ。ちびムーン。」
「早く、助けに行かなくっちゃ！」
「判ったわ。」
その時、アチモフの手下のウィッチーズ６が立ちふさがった。
「ゲゲ、あんたたちは？！」
『ウィッチーズ６で～っす！』
「畜生！こんな時に、お邪魔虫６人娘が出てきちまいやがった！」
「しょうがない！セーラームーン、セーラーちびムーン。此処は我々で何とかする。その間にドラえもんズと協力してほたるちゃんを助けるんだ！」
「だったら、私も残ります。だって、相手は６人ですもの。」
「ドラミちゃんの言うとおり！アタシたち守護戦士とタキシード仮面さまとドラミちゃんの６人でちょうどぴったりだよ。」

「判ったわ。みんな、此処は任せたわよ。ただし！」
セーラームーンはタキシード仮面を睨みつけた。
「その間にドラミちゃんといちゃつかないように！
ドラミちゃんも、キーちゃん以外の男性、特にまもちゃんとゼ〜〜〜〜ッタイくっ付かないように！」
「「そこは余計だ！」」
ドラえもんとキッドは怒鳴りつけた。
「皆さん、早く僕の背に！」
「我輩達も！マハラージャ！」
ドラメッドは魔法の絨毯を出してドラえもん以外のネコ型ロボットと一緒に乗った。ドラえもんはペガサスの頭の上に乗った。セーラームーンとちびムーンは背に乗った。
一行は飛び立ったのだ。

展望台
アチモフとゼオライト達は未だ目を回していた。
「何これ？」
「これは、ソーラーヨットだよ。」
「ミニサイズだから、スモールライトと一緒に使用したんじゃないの。」
その時、ミニミニサイズのミニドラが出てきた。ミニミニサイズだったから、簡単に檻に入れたのだ。
「ミニドラじゃないか。如何して此処に？」
「ドラッドラ~。―（のび労君たちを助けに来たんだ。）」
ミニドラはスモールライトでほたるたちを小さくした。
「わあ、これで逃げられるわ。ミニドラありがとう。」
「アチモフが起きないうちに逃げ出そう。」
のび労達は、檻を抜け出してヨットに乗った。

ソーラーヨットの操縦室

ゼノタイムたちがのびていた。
「わっ、ゼノタイムさん！」
「ゼオライトさん！大丈夫！」
「「だいほうぶだほ～～～～！」」
2人はまだ目が、回っているようだ。
「こうなったら、僕が操縦をしておく。えーっとこれだ！」
のび労は電源を入れた。ヨットは浮かび上がり、展望台を飛び立った。
「もう大丈夫だ。後は、セーラー戦士のお姉ちゃんたちにお願いして阿野爺さんを取っちめてもらおう。」
「ええ。
ありがとうございます。ゼオライトさん、ゼノタイムさん、助けに来てくださって。貴方もありがとう、ミニドラ。」
「ドラドラ。」
「いや、僕達は結局何もできなかったんだ。」
「ていうか、失敗してしまったしね～。」
既に双子は息を吹き返していたのだった。
「なんにせよ。このまま、家に帰らなきゃ。」
その時、彼等の前に角を生やした天馬に乗った2人の少女と青達磨と、空飛ぶ絨毯に乗った6体のネコ型ロボットが近づいてきた。
「あれは。」

上空
うさぎ達はほたるたちを救出するために展望台に向かう途中で小さな物体を発見した。
「あれ？あれはソーラーヨット！まさか、阿野中にミニドラが！」
「そうかも知れないわ！とりあえず・・・。
ミニドラー！アタシ、ちびムーンだよー！下に下りておいでーー！」

ヨット内
「ちびムーンだ。」
「とりあえず、降りて見ましょう。」
7人はとりあえず庭に降りてみた。ムーン達も下に降りてみた。

庭
庭に到着したムーン達。ヨットも下に降りた。
ドラえもんはペガサスから降りて。
「ビッグライト！」
ドラえもんはビッグライトを取り出してヨットに光を当てて、人間サイズに戻した。
ヨットから、ほたるたちが出てきた。
「ほたるちゃん、みんな！」
「ちびうさちゃん！」
「ドラえもんズ！」
みんなは手を取り合い喜んだ！
「よかった。みんな御無事だったんですね！」
ドラえもんの中に入っていたダイアナが顔を出した。実はダイアナたちはドラえもんのポケットの中に入っていたのだ。
「よかった〜〜〜！」
そこへ、アマゾン・ツインが出てきた。
「みんな、無事だったね。」
「アンタ達は！？コイツー！ペガサスお願い！」
「待って、ちびムーンこの人たちは私達を助けてくれたのよ。」
「この2人が？」
「ドララ~。」
ミニドラは頷いた。別にこの2人は悪い人達じゃないことを最初から知っているのだ。
「そうなんだ。僕達は最初はペガサスを使えようとしていたんだけど、ほたるちゃんと触れ合ううちに良心が目覚めてしまったんだ

よ。」
「そうだったの。それなら安心。」
「ドラリーニョ、騙されてはいかんアル。
御主等は我輩たちを油断させてペガサスを連行する気であろう。
」
「だから、そんなことはしないってばー！」
のび労はドラえもん達を怒鳴りつけた。
その時、巨大なロボットがやってきた。Ｄｒ．アチモフのロボットであろう。アチモフはやっと気がついたのであろう。
〈お前達、さっきはよくもやってくれたな！折角の人質を４人も逃がしおって～～～！〉
「シツコイわね！この変態！」
〈煩い！御転婆王女！
おじさんの気が変わらないうちに幻の銀水晶を出しなさいっしょ！さもなくば、城の住民を皆殺しにしてやるっしょー！それと、あいつらも！〉
「あいつら？ま、まさか！？」
「そのまさかよ。」
彼女達の横にアチモフの秘書的存在の紅井（くれない）カオリが立っていた。カオリの片手には拘束されたドラミ達を縛っているロープが握られていた。横には例のウィッチーズ６がくすくすと笑っていたのだった。
「ドラミ！」
「みんな！」
「すまない、セーラームーン。油断してしまった。」
「この６人娘に負けてしまったんだ。」
「もう。
卑怯よ！この爺！」
〈このごに及んで卑怯も桔梗もないっしょ～！早く、幻の銀水晶を渡すっしょ～！〉

「ダメだよ！セーラームーン！ちびムーン！こんな奴に銀水晶を渡すことはないよ！」
ドラえもんは叱咤した。
「どうしても、欲しけりゃ俺達が相手になってやるぜ！」
キッド達は、アチモフマシーンに戦いを挑もうとする。
「この爺さんは俺達が食い止めてやるからドラえもんとムーン達はドラミやみんなを救出するんだ。」
「ドラミちゃん達は僕たちに任せてくれ！」
ドラえもんのポケットからルナたちが飛び出してきた。
「私達がドラミちゃん達を助けるからセーラームーン達はあのおっさんをやっつけて！」
「では、私はお城の人達を助けに参ります！」
「ダイアナ、だったら僕達も行くよ！昨日はキミを冒険に巻き込んでしまったお詫びに！」
「判りました。では参りましょう！のび労様、スネタ様、そしてジャイ吉様！」
「「「オー！」」」
「だったら、これを持って行って！空気ピストル！これをはめて戦うんだいいね！」
「判った！みんな行こう！」
『了解！』
のび労達はクリスタル・パレス内に向かった。
「ほたるちゃん！準備はいい！？」
「ええ！サターン・プラネットパワー！メイクアップ！」
ほたるはセーラーサターンになった。
「自分の為だけにクリスタル・パレスの乗っとこうとする人は許しはしないわ！」
「愛と正義の！」
「セーラー服美少女戦士！」
「セーラームーン！」

「セーラーちびムーン！」
「同じくセーラーサターン！」
「月に代わって！」
『お仕置きよ！』

マシーンの操縦席
「えーい！生意気な小娘共が！こっちがお仕置きしてやるっしょー！」

庭
アチモフロボがドラえもんズと3人娘に襲い掛かってきた。
「来るぞー！みんな気を付けて！」
アチモフが彼等を踏み潰そうと片足を伸ばしてきた時、マタドーラがその足を抱えてひっくり返した。
〈グエ~~~~~！〉
「マー、Ｄｒ．！」
「余所見をするな！」
アルテミスがカオリの顔を引っかいた。その隙にルナはドラミ達を拘束しているロープを切った。
「やったー！これで動ける~！」
「己~~~~！」
ドラミはポケットに手を入れた！
「パーフェクト・ボーリング！」
ドラミはパーフェクト・ボールを転がしてウィッチーズ６の足元を掬った。
「よし、アタシたちも！」
「マーキュリー・アクア・アルソディー！」
水の舞が６人娘を包み込んだ。
「マーズ・フレイム・スナイパー！」
炎の矢が６人娘を黒焦げにした。

「ジュピター・オーク・エボリューション！」
雷の葉がカオリに電撃を与えた。
「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・ショック！」
ハートの衝撃波がカオリをノックアウトさせた。
「みんな凄い！」
「あれ、私達何時の間に！」
４人は咄嗟に新必殺技をマスターしたのだ。傷だらけのカオリは遂に怒った。
「己・・・。」
タキシード仮面はステッキでカオリの頭部を叩き気絶をさせた。
〈ひえ~~~~！か、カオリちゃん達が~~~~~！〉
「余所見はなしですよ！ハチョーーーー！」
王ドラの蹴りがロボットをヒットさせた。
「フギー！」
更にドラニコフの炎をとんできた。
賺さず、ドラリーニョのサッカーボールの集団が襲った。
更にドラえもんの石頭が飛んできてよろける。
「それーーーー、おまけあるーーーーー！」
ドラメッドの魔法の矢がロボットに電撃を与えた。
「ギエ~~~~~！」
「もういっちょーーーー！ドカーン！」
キッドの空気方の弾が当った。
「トドメだーーーー！」
２人のナイフがアチモフの足をすくい、背後からサターンがサイレンス・グレイブを突きつける。
「サイレント・ボール！」
紫の球体が表れてロボットを上空に押し上げた。
「すごい、サターンもなんだか強くなったみたい。」
「セーラームーン、セーラーちびムーン、今のうちに！」
「判った！」

「よーし、僕たちの友情をセーラームーンとセーラーちびムーンに届けるんだ！」
『オー！』
ドラえもんズは親友テレカを2人の武器に掲げた。ペガサスは金の角を2人の武器に向けた。
『我等ドラえもんズ！
行っけーーーー！』
ペガサスの角の光とドラえもんズの親友テレカの光でムーン・スティックとカリヨンはムーン・アローに合体した。
2人はそれぞれの武器をアチモフロボットに目掛けて放った。
「Wムーン・ゴージャス・ドリーム・シュート！」
二つの光がロボットに向かって突進する。光が命中して大爆発を起こした。その後、アチモフが落下するが、ペガサスは背で受け止める。
「ペガサス、ナイスキャッチ！」
その時、上空から数機のタイムパトロールの船が降りてきた。恐らくキッドがこっそり呼んできたらしい。その内の1機にのび労達やダイアナそれにこの時代のセレニティやエンディミオンが乗っている。彼等は手を振っているのだ。

数時間後
のび労達は、ドラえもんに貰った空気ピストルでアチモフの手下を次々と圧倒して城の人々を救出した。その時にタイムパトロールの人が来てその手下達を捕まえたのだ。後にアチモフたちも捕まってしまったのだ。
21世紀後期のネオ・クイーンセレニティは笑顔で微笑んだ。
「みなさん、どうもありがとうございました。おかげでクリスタル・パレスにまた平和が戻りました。」
「30世紀のスモール・レディ。キミのお陰で本当に助かった。ありがとう。」

「いえ、そんな。殆どはみんなに助けてもらいました。」
「ドララ。」
ミニドラはペガサスに抱きついているのだ。
「ほら、ミニドラ。ペガサスは元の世界に帰らなくちゃいけないから、いつまでもアンタと遊んでいる暇はないのよ。」
ちびムーンはミニドラをペガサスから引き離した。ペガサスはにっこりと微笑んだ。
「ありがとう。アマゾン・ツイン。君達はこの世界と全人類を救った救世主だ。これは、ささやかだけど、お礼だよ。」
ペガサスは金色の角の光を2人にお見舞いをする。2人は、古代ギリシャ風の綺麗な衣装を纏ったような姿になった。2人は人間に生まれ変わったのだ。
「これは。」
「僕達本当に人間になったんだ。」
2人は今の自分の姿に目を見張る。
「ドララ~~~！」
ミニドラはきゃっきゃっとはしゃいでいる。その姿を見届けてペガサスは上空に飛び去った。
「ペガサスさん？」
「ドララ~~~~！」
「ありがとう、ペガサス！」
「僕たちを助けてくれてありがとう！」
「いつかまた会おうね~~~~！」
のび労一行は手を振っている。釣られてムーン達も手を振っている。

木の上
木の上からアマゾン・トリオが見届けている。彼等はゼオライト達がいなくなったのでこの時代の此処まで探しに来たのだ。
「あらま、阿野2人。自分だけ人間になっちゃってる。」

「しょうがない子達ね。どうすんのよ。ジルコニアさまになんていえばいいのよ？」
「しょうがない。この2人は僕たちを裏切ったから、僕の手で殺しましたと誤魔化そうかしら。」
「あら、いいの？阿野人にそんな嘘をついて。」
「いいのよ。これは僕にはどうすようもないから。」
三人はそのまま、２０世紀後半に帰っていった。

その後、うさぎ達はクリスタル・パレスでアチモフ捕獲の記念で宴を行った。翌日の朝、ドラミはほたるをタイム風呂敷でまた赤ん坊に戻してのび労達に別れを告げてタイムパトロールに２０世紀末期の十番街に贈ってもらった。ミニドラはドラえもんズとドラミの手によって、無事に未来デパートに返品され、土萌親子は隣町に引っ越していった。
うさぎ達は、無事にそれぞれの家に帰宅するのだった。

決戦Ｄｒ．アチモフ対セーラー戦士（後書き）

２０１１，０２，１２，１１：０８，遂に終わりました。うさぎちゃん達は、その後アマゾン・トリオと激しい戦いを繰り返して遂に和解します。その後、３人はペガサスの森で静に暮らします。
そして、アマゾネス・カルテットとの戦いを繰り広げ、遂にペガサスは新月の女王のネヘレニアに捕えられてしまいますが、その後、セーラームーンとちびムーンによって封印されます。
その後、ちびうさちゃんは３０世紀に帰還してドラえもんズと新たな戦いを繰り広げるのでしょう。
大分お待たせしました。
これにてこの小説を終わらせます。
みなさん、さようなら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2250q/

美少女戦士セーラームーン　ミニドラアドベンチャー

2011年10月6日20時25分発行